

隆景背
向は備へ
て明軍に
對す

同ふ放ち黒煙に連れて切て掛る黒田長政の寒風を防ぐ爲めとて大綿帽子を深く被り鎗を構へ見合せしが既小合戦始りしかば彼の綿帽子を脱で世に聞へたる水牛の甲の緒を堅固とし免鎗を上げて眞先に躍り出でらる隆景が軍兵之を見て長政を助けらるゝ予今日の軍の勝ちたりと無二無三に突立れと香大受高彦伯を詮所と死力を盡し士卒を令し勇を勵まし追つ返へしつ戦ひける日本の兵卒ハ三尺又ハ四尺小餘りたる大太刀に長き柄を添へたる兵器を以て眞向より割り付くるに予大明、朝鮮の薄鉄にて制りたる甲冑を斬ること宛然爪蒺子を切るが如く或は兇の天邊よりスバとニツに別るゝもあり肩より胸を掛けて斜に切て倒すも有り鮮血流れて緋の湖を成し屍ハ積んで山小

等々明の軍兵震ひ恐れ右往左往に敗北す李如松之を見て後陣より大軍を駆て大に進めば豫て備へし日本の奇兵久留米、毛利が勢八千餘人横さま小突立つれば大將隆景一萬餘人正面より眞一文字に切て掛り命は塵芥の如く只々名こそ惜れと明兵の打つ劍を鎧の袖ふて支へ彼の大刀を振りて薙立れば大明の兵士大軍ありと雖も面を向くべきやうもなく七裂八切に切崩され西を指して敗走すれば日本の後陣に備へたる浮田秀家、岐阜秀信、丹波秀勝、木村常陸助、精谷内膳正、長谷川藤五郎、中川右衛門太夫、淺野右京太夫等總軍八萬餘人一同小関を作り喚叫んで切立れば大明朝鮮の軍勢討とるゝ者其數を知らず大將李如松も散々に切立られ餘りに馬を馳ける程に後さまドロツと落ちたり

隆暹が家臣井上五郎兵衛、李如松との見知らぬとも敵の大將をさんなれと鎗を揚げて飛來るを從者二百餘人隔て、之を救ひ他の馬に乗せて逃退きたり大將此の如くなれば、從卒あじかは堪ふべし、薩倒され切殺され討たる者三千餘人幸ふじて坡州まで退きける。偕ても日本勢勇と進み追討せんと云ふを隆景堅く之を制し大軍を深く追ふと終つ味方の爲めに利あらじとて鐘を鳴らして軍を納免凱歌を揚げて王城へ引取りける。勇まじかりなる事共なり。

奇正子曰く小早川隆景が其智計の深くして其勇氣の盛んある此の如きもの古今殆んど稀れあり噫

○第十七章 加藤清正

○清正敵の反を計て城を乗取る

文祿元年朝鮮征討の役加藤清正は慶州より進みける。思ひがけなき日本人原名徳五郎今の朝鮮風の名ふ改めて相圓里と云。險者に逢ひ之を通辭兼案内者として又進みける。に前面に一ツの坂あり坂の左右樹木彌深く生ひ茂り何ふ様怪まげある處にて我れをして朝鮮人たらしめば必ず此處に伏兵を搦ふべし我れ既に斯く思ひ人も亦斯く思ひめとて馬を止め相圓里を召して處の名を問ふ。坂の名を立坂と申す。坂を下りて向ふ。小川あり毫川と號を其川の渡り僅ふ四里(六丁一里)ふ。まて慶州の府内城に到ると申す。清正又問ふ。城を守る大將は如何ある者ぞ。對へて云ふ。大將は晋伯と申す者。智勇ありて謀計を好む。守る兵士三千に過ず。清正之を聞て先手ふ令して此坂の左右樹木の中ふ伏兵あり

と覺ゆる予鐵砲を打込み試みよと言ふに予先鋒の大將加藤清兵衛、士卒に令えて數百の鐵砲を林の中へバラくと打掛けたるに案小違はし晋伯が計略にて二千人の退兵を林の中に伏置き加藤が軍勢の半は通るを待て打出で破らんとこの術なりしが却て敵方より鐵砲を打込れ死傷の者五千餘人出来、兼ての用意相違しなれば勇氣緩み心臆し我れ戦へんと言ふ者一人もあらず林の中よりむら／＼と出るを清正見て鞭を揚げて彼討取れと言ふ程ふそあれ加藤清兵衛、木村又藏、井上大九郎、飯田角兵衛、貴田孫兵衛、森本義太夫、庄林準人、齊藤立本等一騎萬當虎優りの勇士得物々々をヲツ取て無二無三に難立れば晋伯が勢討たる、者數知らず坂を越へて粉の如く逃散るを追立々々首を取ることに

六百餘級川中へ追落され溺れ死する者數を知らず此時早や日も西山に沈みれば清正令して此勢を抜くべからず筏を組んで川を渡り今宵の内に府内の城を攻取れやと其邊の竹木を伐て數多の筏を造り數萬の松明燈一つれえいと叫びつ、難なく川を渡し陸に揚るや否や勝に乗たる日本人朝鮮人の手並は知りたり我が日本の小兒よりハ猶ほ弱ま進めやくと呼はりて只一飛に城際へ押寄せ仕よりを付けて城の内を窺ふふ寂とえて人音なし諸軍怪と躊躇けるを早り雄の若者三十餘人バラくと走り寄り城門を打破り城中に入るも敵一人もあらずりければ諸軍後み續て皆城中に亂れ入り此處や彼處を見廻るに大なる糞小便酒を充滿と貯へ種々の肉あざ取散し狼狽たる有様あり

清正之を見て冷しけるは是れ餌を與へて大魚を釣ると言ふ計畧なり我等甲冑を解き心ゆるりと休息せん時四方より火を掛り塵ふせん鬪韓人先ら計畧なる予酒を撰み飲むふと勿れ毒あふんも知るべからせと命せしめける程に諸軍皆咽喉をクセク鳴らまて守居たり時一人の士卒進み出て申す様ハ君の命の如く敵方小飲置きたる酒必定毒酒にて候べし然れどを若し又毒あき美酒ならんには飲まずして止まなんも口惜き次第なり某日本を出でし日より既に命ハ捨物に致し候へハ今此酒を飲んで毒の有るや無しやを試み申さん是れ即ち大川の瀬踏するも同事にて候と云も取す大なる器に彼の酒をじひ三四盃飲まざりぬるに何の怪ま死事もなく其味ひ甚だしと云ふ清正大に喜

び彼者を厚く褒美し諸軍勢小飲ましめて軍の勞れを散まぬる時小清正、加藤清兵衛、庄林隼人二人に一千餘人の選兵を授け城を出で二里許(三十六丁一里)の間小埋伏せしめ城の中に鐵砲に彈丸を込免矢束解て今や敵の寄せ來ると鳴を静めて待居より然程に韓將晋伯は數千騎の軍兵を引卒し夜の丑の刻に府内の城小押寄せ燒草數多取持せ既に四面より火を放たんとする所に城中に懸並べたる大砲小銃の鐵砲を一同にドツと打放てを思ひがらなき朝鮮勢何かハ以て堪るべきひいと打倒され周章ふた免ぎ漂ふ所を清正令して城門を八文字小押開きドツと喚ひて斬て荒れハ赤だ軍小馴れざる朝鮮人一支へを支へず右左往に亂れ走るを豫て埋伏したる加藤清兵衛、庄林隼人一千餘人

の選兵を引て餘まさじと突來る前面には大將加藤清正、南
無妙法蓮華經の大旗を押立て一人も遁さず討取れやと大
音に令なせば旗下の勇士等我れ先きに鎗を上げて敵を討
つこと數知らず大將晋伯も清正の鎗玉に上げられて此野
の露と消えしかば殘兵道を求めて散々小逃散りふける清
正の討取る首一千二百級凱歌を揚げて府内の城に火を掛
けて焼拂ひたり

奇正子曰く人心の同じかざるの其面の如しと雖ども
名將の考へは多く符節を合せるものあり然れば我をし
て敵とらしめば斯くせんと思ふことは敵も亦斯く思は
免と推察して其備を爲さねばあらぬとなり昔し漢土
三國の時魏の曹操赤壁の戦ひ敗れて走るや人皆周瑜、孔

明は智深く計多き者なりと言ども我れ其能なきを笑ふ
なり若し我れをして周瑜孔明あらしめば此處に伏兵を
置ん若し此處に伏兵のあらんには我等一人も遁るまじ
と其備へをなさで笑ふもの三たびにして三たび伏兵の
爲えに辛きめに逢ひしは正しく我が思ふものと敵も亦
思はめと言ふるを思はざるの致を所あり然るも今加
藤清正の若し我れをして敵ならしめを斯くせん然らば
敵も亦斯くせんこと疑ひなし且つ夫れ敵將晋伯の謀計
を好む者なりと聞く上からは愈々我が思ひし小違はず
とて其備へをなしさるは是れを即ち清正の勝利を得る
所以なり然れども敵若し非常の名將にして孫武、孔明の
如きものならんには先づ敵をして割らし免て却て其反

を計ることあれば是れ亦注意ざるべからず去りるが
よと聞くと所を以て斯く其又反までを計る程の名將よあ
るに足れりと思惟し斯くは計りしなれ

○第十八章 加藤嘉明

○嘉明、奇計を施して敵船を乗取る

文祿元年朝鮮征討の役日本船手の大將九鬼義隆、藤堂高虎
脇坂安春、加藤嘉明等唐島と云ふ所に船を寄せしに朝鮮船
手の大將李舜臣、元均等水軍を整へ、彼に陣を取りて日本勢
を支へんとす藤堂高虎夜中敵船近く忍び寄り無二無三
に斬て出で小船三艘奪ひ取りければ朝鮮の水軍之れに懲

り軍列を正し備へを密にして夜討朝敵の用心頗ぶる嚴重
に及て今は中々不意を打つべき手術もなく去りとして尋常
の合戦をなさんに敵の大軍ふて味方小勢のことなれ
ば其勝利憂束なく日本の諸將九鬼義隆が本陣ふ集會り軍
の評議なしとりけるに加藤嘉明進み出で申されける朝
鮮船手の軍兵を見るに思ひの外大軍にて味方の小勢を以
て環に圍ひなす士卒の損亡多かるべし宜しく軍器を定め
一戦に勝利を得ること肝要ふ候と議せられければ諸將も
尤もなりと之れふ同じ急に押寄せ戦はんと云ふ者なし時
に嘉明密に旗下の隊將塙團右衛門と謀計を示し合せ一日
物見船と號し團右衛門數十人の逞兵を引具ふ小船に打乗
り大濤を押し切りて敵の方へ漕出でたり之れに續て同トく

小船五六艘加藤が組下の兵士と見えて蛇目、下り藤の船印
 押立て銘々後れじと漕出せば總大將義隆、嘉明も向ひ御手
 の勢と見えて候が軍命を破り敵船近く船を寄せしど早く
 禁めて過ちなし給ひすと申しければ嘉明聞て斯ハ怪しか
 らずの若者共が行跡かな大將の軍命も出さざる敵に向ふ
 て船を出すは何事予止まれと船端ふ出で、呼はれど
 も兼て示し合せしことなれを塙園右衛門を首魁とし其餘
 の兵士皆聞ゆる顔の半兵衛もて頻りに船を漕出す嘉明大ふ
 忿怒る形状にて軍法小背く者共我れ自ら行て引ずり來
 んどて早船に打乗り扇を開け止まれくと喚はりつる之
 れも同じく船を急ぎければ加藤が手勢我れもくと船の
 纜解き終ふ朝鮮の水陣へ押寄せたり朝鮮の水軍は此體

を見て斯ハ拔菟と見たり然し大將と覺しき者止まれと
 と呼より引ずり歸ふんどのことあれば今に追附て引き歸
 らんと思ふ間も荒々の加藤が兵船間近く漕來るに予アラ
 く敵船寄せたる予防禦げや者共と云も果てず嘉明忽ち
 身を躍せて敵の船へ飛入りたり之を見て家臣河合壯太夫
 同壯次郎、萩野作左衛門、鍵掛武助等を始発とし聞ゆる兵士
 數十人バツくと飛乗りて太刀抜きかざし切立つれば朝
 鮮勢案外のみとにて大ふ驚き船底ふ逃入て劍を抜き鐵を
 揃へ散々に射さりけるを嘉明少しも猶豫氣色なく船底に
 躍込たり従者あじかと猶豫すべき我れもくと續て飛入
 りなで切りに斬殺して遂に此船を奪取りたり其外塙園右
 衛門を首魁とえ組下の勇士佃治郎兵衛、加藤權七郎銘々分

取高名を願し目覺しき戦ひを爲しにける然程に日本の諸將加藤が此軍前を見て嘉明討すを呼はりて八方の船を漕寄せ散々に戦へむ朝鮮船手の大將元均恐れぬのとき船を捨て逃出せば此手の兵卒總崩れとなりて我れ先きよと陸へ船を着け八方へ逃散りより加藤一人の武勇により朝鮮の番船二十艘乗取り海中へ切捨てたる兵士六千餘人類なき高名ありなり

奇正子曰く兵書に稱す將に西せんとして之れに示すに東を以てまると今加藤嘉明は此旨を取て將に進んとし之れに示すに退を得てしたる者也實に能く計えと云べし

◎第十九章 大谷吉隆

○慶松、偽計を以て勝家を欺く

大谷吉隆幼年ふえて未だ慶松と云ひし頃羽柴秀吉と柴田勝家と日頃折懸しく特に山崎の合戦後て織田家、家督相續人の議相合はざるより別して折合善かゝりありける所よ此時秀吉長濱城ふありけるが勝家當城所望の趣き申入れしに秀吉一議にも及ばで此處立退れて勝家の所望を予叶へてけり斯く今彼是云ふて其望に從へねば惡ありあんと思ふ所ありてあま然程に柴田勝家の長濱に入城し且つ又柴田方に心を通ゆる神戸信孝、瀧川一益の二將も近邊に居て三將、秀吉と白眼合ひて居たりけるが秀吉は何にかな工夫を廻として三將を討たばやと思ひさも何分も三將を一度に討んことはハト六ヶ敷れば先づ瀧川、神戸の二將を討ち其羽翼を断ちたる後柴田を討んるの上策

取高名を願し目覺しき戦ひを爲しにける然程に日本の諸將加藤が此戰前を見て嘉明討すまと呼はりて八方舟船を遣寄せ散々に戦へむ朝鮮船手の大將元均恐れぬのよき船を捨、逃出せば此手の兵卒總崩れとなりて我れ先きよと國へ船を着け八方へ逃散りとり加藤一人の武勇により朝鮮の番船二十艘乗取り海中へ切捨てたる兵士六千餘人類なき高名もどなり

奇正子曰く兵書に得ず將に西せんとして之れに示すは東を以てまると今加藤嘉明の此言を取て將に進んとし之れに示すに退を得てしたる者也實に能く計えと云べし
◎第十九章 大谷吉隆
○慶松偽討を以て勝家を欺く

大谷吉隆幼年ふえて未だ慶松と云ひし頃羽柴秀吉と柴田勝家と日頃折辱しく特に山崎の合戦後織田家、家督相続人の議相合はざるより別して折合善かたずありける所よ此時秀吉長濱城ふありけるが勝家當城所望の趣き申入れしに秀吉一議にも及ばで此處立退れて勝家の所望を予叶へてけり斯と今彼是云ふて其望に從へねば惡ありまんと思ふ所ありてあま然程に柴田勝家へ長濱に入城し且つ又柴田方に心を通ゆる神戸信孝瀧川一益の二將も近邊に居て三將秀吉と白眼合ひて居りけるが秀吉の何にかな工夫を廻として三將を討たばやと思ひさも何分よも三將を一度に討んことは十と六ヶ敷なれば先づ瀧川神戸の二將を討ち其羽翼を断ちたる後柴田を討んよとの上策

なりとの思ひきも何分にも柴田が長濱小居ては此事成り
 難し何んぞの手術もあつば柴田を退けんと脚肝を碎けど
 も流石の秀吉も此智慧にハ四り果て千思百考も好き工夫
 なふして思案に盡きたる所へ度松来り未だ成人とならぬ
 千倍あれと因より宜き若なれば秀吉の憂色を見て君には
 常々憂りし氣色の見ゆる何事の出來候やと問ひ参らせ
 ちに秀吉いしくも問ひしや開ハ汝小告ぐるも益なきよと
 なれど問ひとあらむをむへもせんとて其起死を申すに度
 松打笑ひ斯程の事よ君と憂ひ給ふる此れ取の事ハ容易く
 なし得べし然し茲に三千兩程の金あるてハ叫まじ其三千
 兩の金だにあらハ十日を出でざる内に柴田を北の庄へ退
 なし免んこと何より以て最と易き事よて候と言葉流水に

述べしか三千兩ハ愚が其事だに爲し得るよとあれハ五千
 兩が一萬兩にても厭ひハせぬや然れば三千兩入用とあら
 ハ先づ三千兩遣ハまべし而て其計ハ如何と問ふに度松
 左を茲にて問ひ給ひぞ十日の内ハ必ず御知れ申さん秀
 吉然し汝宜な計ひとて三千金を遣はるにぞ度松ハ之
 を受取り聽て腹心の者數人談合ハ北國指して行ハ柴田が
 本城越前北の庄と越後の間往來を終口米穀及び草鞋等專
 々軍用の品物を買ひ歩行き密に流言して曰く越後上杉景
 勝今勝家の留守を幸ひとし先年來の宿恐みを散らさんす
 らんとて近日北の庄の空虛を襲ハんとて米穀草鞋等軍用
 の品物を買入最中なると聞さる柴田が細作鷲傳印天し斯
 ハ一大事と飛ぶが如く長濱へ走り歸りて勝家に斯くと報

じれれば流石鬼を欺く勝家を、大變なり北の庄
 の空虚を景勝に襲はれて、勇々敷大事なりイテ行んと取
 る物をも取り敢ず北の庄指して飛ぶが如くに予馳行きけ
 る馳て北の庄ふ入城し急ぎ斥候を出して其動靜を窺はま
 むるふ上杉のしづま返へりて何の變りしよとをまき斯
 の無根懸言なれを早々取て返え勝家に斯くと報じけれを
 勝家齒嚙をなし猿奴めふ欺れより憎き彼奴が所爲かな
 其義ならを急ぎ長濱ふ出張して猿奴が細首を引き抜き
 吳んずものをと躍りて予怒りける率や明朝の長濱ふ出張
 せんと旅行仕度の調ひけるよ折りしも寒氣烈しく肌膚を
 ツン烈くをかりにて五六尺の人間も皆噤然として寸小
 収縮リアラ極寒きこと哉と云ふ程ありあれ一天忽ちかき

白み綿を割ッて投ぐるが如死ぼつゝたる大雪降り來と
 一夜よして一丈餘を積りければ勝家出んとして出づること
 と叶はず日頃の氣象烈しき勝家斯く秀吉には欺れ雪に
 妨げられ烈火の如く怒り怒りて居る内に早や秀吉の瀧川
 を討ち神戸を降まにけり斯くて雪を次第ふ解けたれば勝
 家急ぎ長濱に出張して見れば豈に圖らんや瀧川の討れ神
 兵は降りにけり斯の如何ふと暫時言葉も出でざりけると
 の慶松の計ひ能く圖に當りしなれ
 奇正子曰く慶松が此計ひは漢土三國の時の諸子が謀計
 に能く似たり此人ふえて後年關ヶ原の役、大坂方に味方
 して大敗せし石田三成此人の云ふ所を用ひざるふあ
 り若し吉隆大軍師となりて島左近幅軍師とありしこと

ならんには關ヶ原の役未だ勝敗別とべからざるものありと信ずるなり嗚呼大坂方の遺憾ある哉

◎第二十章後藤基次

○基次、輶輜車を用ひて晋州城を投ぐ

文祿年間日韓の葛藤一たび和陸なりしが復再び破れて諸將又々渡海し加藤清正、小西行長を先鋒として諸軍晋州の城を攻むること甚だ急なり抑も晋州の城と云ふは大江前にありて底深く三方を岩石險峻に壁を立たる如く上に堀を掘り狭間を開きて之を守れり城兵は僅かに二萬餘人にして寄手と殆んど十萬人なり然れど當城の固より要害堅固なれば等閑にては抜くこと叶ふまじと思ひ柵を組上げ或は楯竹束は衝並へ或は熊手繩階子なんどの攻具を用意し

押寄々々攻登んと計れども城中防禦甚だ堅固なまて大木大石を投げ下し矢を放つると透間なく寄手攻めむぐんでろ見へけれども此城を攻抜ねば大圍の御怒りあらんことを恐れて命を捨てひしと群り寄せ切岸に手を掛り乗入らんとす此時城中より銅を湯小沸し寄手の中へ懸き散らし松明を以て攻具を焼立て手を換へ品を改めて防ぎ取へばさしも勇みし日本勢施すべき手術に盡き少し攻口を引退き息を繕ぎて見合せける此時黒田長政の家臣後藤基次輶輜車と云ふ物を造り出して攻んとす是れは厚き板を以て龜甲形の箱を製へ内小強き梁を敷設し其上へ牛の生皮を敷十枝張付けたれば如何に大木大石を投げ掛くると雖も臨り上りて車を損せざる發明をなす其中より鐵の棒

を以て進退を自由よせるふと船の如き基次自ら數十人を引連れ此車の内ふ入る晋州城の櫓の下へ押付る石垣の角石へ鐵木挺を入れてふと放さんとしけるを見て城中より大木大石を投落し火箭を射ること雨の如しと雖も更に車を損えることなし兎角する内に早や隅石一ツ引抜きければさしも堅固の石垣も七八間が程瓦落々々と崩れふける目覺しかりける働きなり時に加藤清正が陣中より一人の兵躍り出で晋州城の一番乗清正が身内森本儀太夫と名乗り堀に手を掛り乗入んとするを聞て黒田が督臣栗山備後守南無三寶後れたりと森本ふ引添へて乗入りしに城中より射出す矢篠を亂すが如し先きに進みし森本内兜に矢一ツ的て後さまに下と落ちたりけり粟山之を見て備

後守一番乗と高聲ふ呼はれを加藤が家臣飯田角兵衛走り來て粟山の頂上帯ひツ掴んで引戻し南無妙法蓮華經の旗さつと靡せ清正の臣飯田角兵衛晋州城の一番乗と呼ばれを黒田が勢一時に黒みかゝりあいつく聲して乗込む程ふ城中の朝鮮人散々に亂れ本丸指して引入りけるを北門の大將金千鈿此の有様を見て城は早や落ちたりと思ひ敵も來ふざる其先きに潰れ立て遣出せば日本勢得たり賢しと込入々々當るを幸ひに切倒し敵を討つこと數知らず夫れより總軍一同に進み討取る首級殆んど二萬遂に城を焼死境を埋め凱歌を揚げて釜山浦へ歸陣しけるハ勇ましおりける事共なり

奇正子曰く古への戦争ハ謀計及び勇力を以てするもの

を以て進退を自由よせるふと船の如き基次自ら數十人を引連れ此車の内ふ入り晋州城の櫓の下へ押付る石垣の角石へ鐵木挺を入れてみじ放さんとしけるを見て城中より大木大石を投落し火箭を射ること雨の如しと雖も更に車を損るることなし兎角する内に早や隅石一ツ引抜きければさしも堅固の石垣も七八間が程瓦落々々と崩れ小ける目覺しかりける働きたり時に加藤清正が陣中より一人の兵躍り出で晋州城の一番乗清正が身内森本俊太夫と名乗り扉に手を掛り乗入んとするを聞て黒田が舊臣栗山備後守南無三寶後れたりと森本小引添へて乗入りしに城中より射出す矢篠を亂すが如し先きに進みし森本内宛に矢一ツ的て後さまに下と落ちたりけり粟山之を見て備

後守一番乗と高聲ふ呼はれを加藤が家臣飯田角兵衛走り來て栗山の頂上帯ひつ掴んで引戻し南無妙法蓮華經の旗さつと靡せ清正の臣飯田角兵衛晋州城の一番乗と呼ばれを黒田が勢一時に黒みかゝりゑいゝ聲して乗込む程小城中の朝鮮人散々に亂れ本丸指して引入りけるを北門の大將金千鑑此の有様を見て城は早や落ちたりと思ひ敵も來ざる其先きに潰れ立て遣出せば日本勢得たり賢しと込入々々當るを幸ひに切倒し敵を討つこと數知らず夫れより總軍一同進み討取る首級殆んど二萬送ふ城を焼死境を埋め凱歌を揚げて釜山浦へ歸陣しけるハ勇ましりける事共なき

奇正子曰く古への戦争ハ謀計及び勇力を以てするもの



基次
觀車之
明て晋州
城之萌す



其常にして器械の整良堅固あるものを以てするもの殆んど稀れなり是れ當時未だ物理學開けざるの然らむる所なり然るに後藤基次ハ此の時にありて斯の如き整良堅固ある器械を造りて敵城を抜き一ハ第十九世紀の兵家に一步を譲らざる智將と言ふべし

◎第二十一節 真田幸村

大腦氏曰く俗間に稱する漢土で孔明日本で楠とと深く兵法に通じて巧み小謀計を運ぶし能く兵を用ひて敵を破るの随一などとの意ならん余思ふ此言ハ天正以前小起りしものなりと信するなり何や若し天正以後小起りしものなれば宜しく漢土で孔明日本で真田と言ふべき苦なり然るに斯くは言ハで日本で楠と言ふるを以て知るべきのみ

抑も正成と幸村との謀計を並べて見る時は幸村の謀計ハ正成の謀計よりハ遙か巧みにして日を同ふして語るべからざるものありと存す然るに其名譽の廣狭を問ふ時は正成の名譽廣くして幸村の名譽狭きは抑も故あり何や正成ハ始終一君に事ハま誠忠の者ふして幸村は武田、豊臣の二君に事ハし者なり故に忠臣二君ふ事ハすとの反對にて不忠臣二君に事ふとの誹謗なき能はず畢竟正成の名譽ハ八九分迄誠忠分子の名譽ふして謀計分子の名譽ハ僅か一二分に過ぐず然ればふや後世正成の爲め石碑を建る者嗚呼謀臣正成と言ハす一嗚呼忠臣正成と言ハるなり然るに幸村が名譽ハ十が十皆謀計の名譽あり故に正成と幸村と全體名譽の重量を料する時ハ正成に十二分にして

幸村の十分なるも特に其謀計名譽の重疊のみを辨る時ハ
 幸村に重くして正成に輕しと言はざるを得ず夫れ正成の
 敵手の常ハ凡將弱卒にして幸村の敵手の常ハ賢將強卒な
 り而して敵を破るの妙計常に幸村に多くして正成に少な
 し是れ幸村の智謀遙ふ正成の右に在る所以なり若し之を
 疑ふ者あらずに楠三代記と具田三代記とを併觀する時は其
 優劣の昭々として掩へらざるものあるを知るべし其れ
 までもなく本書の上に就て兩家の謀計を比較れば我が言
 の違はざるを證するふ足れり是を以て之を觀れば漢土で
 孔明日本で楠とて天正以前即ち具田幸村の生れざるの前
 に起りしものあること推して知るべし之も若し又天正以
 後ふ起りまものありとせば深く事實を究めざる粗忽の言

とこそ言はざるを得る故に余ハ之を改め漢土で孔明日本
 で具田とは言はんを存するなり幸村始めハ前後二回上
 田に籠城し終りにハ前後二回大坂に籠城し終身籠城を以
 て口を忘る所謂口本魂にて始終弱を助けて強を挫ぎし所
 爲と身中の身とあるは之のつれ而して上田籠城は小にして大
 坂籠城ハ大なり故に具田の具田たる所以幸村の幸村たる
 所以のもの大坂ありといふ人々の言ふ所又口本言ハぬ者
 を心に想ふ所なら先成程具田の具田たる所以幸村の幸村
 たる所以のもの大坂ありて存すべまど中せども奇計
 を施して奇手を破り幸村の謀士なるよと後の世まで人々
 の感ふ事ばかりしは大坂ありて上田ありと申すべし
 是れ一たび本書を精く時々直ちに知り得るの事實なり然

れを何以て小き上田籠城ふして且つ幸村の年齢尙ほ若く
 卵たまごの殻かの未だ尻しつを脱だれぬ時にありてハ奇計多くして既ふ
 壯たけなふ及んで思慮しりょ定りし時の大なる大坂籠城に奇計少き
 や是れにハ抑も故あり何ぞや謀士腦には百萬の敵を破る
 の妙計あるも若し之を用ふる人に逢あはずんハ如何千里の
 馬も伯樂はくらくに逢あはぬを其千里の能を顯あらわすこと能あたはず謀士も
 茲こゝに至らハ亦其能を現はすものと能あたはず空くうままく凡夫と伍ひとを
 同くせざるを得ざるべし幸村上田籠城の役ふありてハ城
 主の子息にして且つ城主眞田昌幸まさよし天下の名將にして子息
 幸村の奇計を容ゆるふの度あり故に幸村其心謀を施すに妨さまたげ
 なく運らす所の謀計皆能く充分に行おれり然るに大坂
 城にある時ハ佞臣ねいしん大野道犬等が爲なす妨さまたげられ接つじ出で

し謀計の用ひられずして止むもの常に十が八九あり如何
 ぞ幸村其智謀を現すことを得んや是れ幸村が奇計小籠城
 の上田ふ多くして大籠城の大坂に少き所以なり漢土に
 於ては謀計ふ富む者孔明を以て第一とし日本ふ於てハ幸
 村を以て第一とす而して孔明と幸村を比較くらべ孔明の智
 謀少しく幸村の右にありが如しと雖なども孔明と唯智の一
 にして勇ゆうなき者の如し然るハ幸村ハ智ちに兼かぬるに又勇ゆうあ
 り常つねに諸卒と共に先鋒せんぽうに進みて敵人を討つこと蒞た子し爪つめを
 切るが如し因て考ふるに兵事全體に於てハ幸村ハ孔明と
 取とりて優劣うりつありしと言ふも亦可なるが如し余は幸村の奇計を
 記するに先だち聊いさか其人物を論評ろんひやうするも此の如し
 ○幸村きんむら鶏卵けいらんの謀計ばくわいを以て大に奇手を破やぶる

真田父子一千二百餘騎を以て上田に籠城するや織田、徳川
 北條の三家都合二十餘萬人を以て百重千重小取圍み三方
 よし總攻にせんと予致しける真田如何に智謀あるとも今
 と施すべし之の術なく予見ぬふける此時城中にては其夜即
 ち天正十年三月廿三日の夜に到り城主真田昌幸ハ一族郎
 等を集めて申しける我れ不肖ありと雖も主君武田勝
 頼公の遺託を蒙りしを以て幼君勝千代君を守立て參らせ
 武田家を再興せんと當城小籠りし所織田徳川北條の三家
 大軍を以て三方を圍み既ふ今日織田方梁田、金森の兩將打
 出たり然る上ハ元來堅固あらざる當城なれば敵の爲爰に
 打破られ亡君の望みも達せず我々も獄門の木に首を懸さ
 んふとあるを亦測られず是れ誠ふ口惜き次第あれども武

の家小生れては歎くべき所ふあらず方々にも亦人ハ一代
 名ハ未代随分と未練の行跡あり勇しく勦戦して英名を四
 海に轟かせられよとさも探り予申されければ一座の者共誰
 一人慥る者なく勇み猛りて皆此義に同じける然るに與
 三郎幸村當年十四歳なるが進み出で、申しけるに誠は武
 の家又生れし者なれば忠小依てハ死すること敢て珍まか
 らぬことなれども借ても父君よと命二つありて明朝死を
 突給ぬとい宣まぬか昌幸怒つて汝が幼年の身として何條
 父がいふを嘲弄るぞ命二つあるかとは奇怪の一言なりと
 申しければ幸村然ればにて候今父君討死したまひ、武田
 の再興は誰かふれを引受くるものあらんや然るに仍て命
 二つありやとい尋參らせしなり昌幸暫時打案じ汝が申す

ころこ一理あるふ似たれども今三方の大軍蜂蟻の如く雷
 城を圍ままかバ假令孫吳の法あり孔仲の術ありとも今ハ
 早や籠の鳥、網の魚、袋の鼠亦如何ともまゐること叶はず何の
 術ありてか此圍みを解くことを得んや依て死を究めしむ
 り幸村笑て大敵も恐るに及はま小敵も侮り難事あり父
 君にハ那おれバ斯くバかまの敵を恐れ給ふや昌幸が曰
 く我れ既ふ防戦の術に盡きたり幸村曰く某防戦仕らん昌
 幸大に驚き何として此の大敵を防禦さ候んんとまゐる予幸
 村聽て郷等ふ命じて數萬の籠を前に置きたれバ昌幸不審
 ながふに之を見れば皆鶏卵を容れたり昌幸打笑ひ是れ小
 兒の戯れ何條此大軍を破る術ふ用んや幸村某謀て此鶏卵
 の謀計を思ひ付き領内より取寄置きたり昌幸が曰く此鶏

卵に謀計ありとハ如何ある謀計の之れあるもの予幸村聽
 て鶏卵一ツを取り小刀にて之を割り内の黄白を去て此内
 へ煎砂を入れて合せ紙を氷に浸し割口を覆きて昌幸が前
 に出し敵勢城下に寄來ふん時此目潰を以て敵に擲けなば
 皆盲人同前となり手ふ立つ者ハあるべからずと申えけれ
 ば昌幸大に悦び汝が奇才我れ感ずるに餘りあり迎夫れよ
 り直機鶏卵を大將雜兵の別なく與へて謀計を授けたれば
 數刻を経ずして數萬の目潰成就致まける程ふ櫓々ふ十籠
 或ハ二十籠ツ、取備へ置き寄手運まと待掛たり翌くれバ
 天正十年三月廿四日の朝まだきより三方の寄手ハ响と聞
 を作りて押寄せ鍵繩打懸け勇みに勇んで攻立るに城中よ
 りも時分は好まど件ハ鶏卵を合圖と均しく擲出せば何條

もつて堪るべき胃面類のたふひなく當り次第に破砕けし
 かば煎砂は兵士の眼に入りてさしもの勇夫も暗夜をたど
 るも異ちす城中よりは之を見濟し時分は能死と松本
 口織田勢への真田源次郎輕井澤口徳川勢へは同隠岐守信
 尹、笠ヶ城口北條勢への同與三郎幸村何れを各三百餘騎を
 率て関を作り攻蒐れば恰も盲人に均まき寄手の面々働く
 こと叶えずして我れもくと敗走し同士打ちするもあり
 或は踏れて死するもありて一萬五千餘の軍卒雲類か、ッ
 て落されしの見苦しかりける有様あり

奇正子曰く幸村の深智茲よ止まらず何れ後の件ふ記せ
 る謀計を用んが爲謀め鶏卵の謀計を用ゑる也故に前後
 の謀計を合せ見る時一層の妙計たるを感すべし

○幸村火攻を以て大に寄手を破る

織田、徳川、北條三家の上田城を圍むや真田幸村十四歳にし
 て鶏卵の謀計を以て大に寄手を取りまかむ徳川家康ハ斯
 くばかりの小城なりと侮りまことの不覺さよとて陣々小
 觸れられけるハ暫く城攻の事は停止らるべしとありしか
 ば織田、北條方にて亦同じく攻寄する事を止免遠攻に致
 したれば城中にてハ遠攻との由を聞き昌幸是れには大よ
 難儀して種々工風を凝しなる所幸村出で來り父昌幸
 に向て申しなるハ三方の敵兵遠攻に爲を父君に之を
 患ひ給ふか昌幸答て遠攻に逢てハ所詮兵糧に事を欠ん去
 れハ籠城ハ心元ある之れに依て慮ふるなり幸村冷笑ひ今
 宵某敵兵を欺き必ず一汗流させ申すべし父君にハ本丸に

ありて篤と幸村が計ひを御覽あれかしと申しなれと昌幸
 然らば汝宜ま計ふべしと申しけるも昌幸が大膽幸村
 が不敵何れも類ひ稀ある英智なれ幸村の夫れより松浦七
 郎荒川勝藏、畔柳九藏、海野太郎兵衛、望月太郎左衛門等に命
 じて城の後の山嶺さへ炎々と明松を點させ上田の城より
 越後路へ落行く體を爲しなれと北條勢之を見て儲てハ具
 田昌幸籠城叶ひ難きを察し越後路へ落行く者ならん去來
 や追蒐け武具を剝取べしと一犬虛を吠れば萬犬實を傳ふ
 の習ひ一人斯くと云出せば聞く者之に附會し是れ具田
 の上杉が方へ落行と覺えより如何様追蒐け高名せんすと
 思慮深き面々我れもくと笠ヶ城の後より明松を目的に
 進みければ北條陸奥守、大道寺駿河守、松田尾張守等他に先

きを越せれしと押合々々追蒐け行きて三四里を過ぎ趙々
 遙に見れば明松の光りの四邊に備て峯々畫の如くありし
 小松田風と心付き諸將も向ひ若しや具田が偽計にてハあ
 きか人を遣はて見せ給へと云ひしは斥候の者を出きて
 見せけれと大明松を峯々の枕小結付たるばかりなれば斥
 候の者斯くと告げしに北條勢大に怪と居たりし所へ三千
 餘の軍勢來りけれと不審しと能々之を見れば織田勢蘆田
 下野守平手左衛門、金森五郎八、淺井周防守が軍勢なり大道
 寺、松田尋ねるハ各々方ハ何故に夜中此處へは來り給ひ
 し予織田勢答へて然れを我々上田城の動靜を日夜窺ふ所
 に夜々明松を燈し連ね越後路へ落行故討留んと來りしな
 り然るも軍兵とてハ一人だも觀せず只明松の此所彼處に

ありて篤と幸村が討ひを御覽あれかしと申しなれ昌幸
 然らば汝宜ま計ふべしと申しけるより昌幸が大膽幸村
 が不敵何れも類ひ稀なる英智なれ幸村の夫れより松浦七
 郎荒川勝藏、畔柳九藏、海野太郎兵衛、望月太郎左衛門等に命
 じて城の後の山積さへ炎々と明松を點させ上田の城より
 越後路へ落行く體を爲しなれと北條勢之を見て偕て、眞
 田昌幸籠城叶ひ難きを察し越後路へ落行く者ならん去來
 や追討け武具を剝取べしと一犬窟を吠れば萬犬實を傳ふ
 の習ひよ一人斯くと云出せば聞く者之に附會し是れ眞田
 の上杉が方へ落行と覺えさり如何様追討け高名せんすと
 思慮深き面々我れもくと空々城の後より明松を目的に
 進めければ北條陸奥守、大道寺駿河守、松田尾張守等他に先

きを越されしと押合々々追討け行きて三四里を過ぎ趙の
 途に見れば明松の光り四邊に備て壘々壘の如くありし
 小松田風と心付き諸將小向ひ若しや眞田が偽計にていあ
 きか人を遣へて見せ給へと云ひしよ斥候の者を出えて
 見せければ大明松を壘々の枕小結付たるばかりなれば斥
 候の者斯くと告げしに北條勢大に怪も居たりし所へ三千
 餘の軍勢來りければ不審しと能々之を見れば織田勢蘆田
 下野守平手左衛門、金森五郎八、淺井周防守が軍勢なり大道
 寺、松田尋ねるる各々方何故に夜中此處へは來り給ひ
 し予織田勢答へて然れを我々上田城の動靜を日夜窺ふ所
 に夜々明松を燈し連ね越後路へ落行故討留んと來りしな
 り然るも軍兵とて一人だも觀せず只明松の此所彼處に

結付なしのまなれば不審に存じ愛ふ處に居りしに思ひを
 寄らす貴軍に逢へりと答へければ大道寺、松田某等も亦御
 同然なりと共ふ不思議と眉を顰めける所ふ又徳川勢管沼
 新八郎、小笠原與八郎等二千餘人にて馳來り是れも同じく
 右の處さふて不審せし斯くてハ長居も無益なりとて諸勢
 ハ我陣に立歸ると今來り一道へ差掛りまに道は狹き道
 ハ一面火炎とありて歸るべき様もなかりければ諸勢大に
 仰天し如何のせんといふと狼狽さむぎ臺に俯ひ彷徨ひ人馬上を
 下へと騒動して猛火の中に苦しむ様ハ地獄の責も斯くや
 あらんと恐ろしき言ふ計となり斯くと見る内に杭木
 小結付けし明松燃ゆる煙して地に落ちければ琛て設けし地
 雷火一度よりと發しければ何様以て堪るべき山の皆火

炎とありて燃上る是れに因て織田、徳川北條の軍勢燒死を
 る者員知れず僅ふ大將分の者をか漸々幸ふじて遁出た
 り此の謀計に罹りて死せる者八百餘人手負二千六百餘人
 とぞ誠小怪有の謀客なり
 奇正子曰く名將の敵を敗る多くの火攻を用ふ孔明幸村
 東西其謀計を一ふ今本計の巧みある實小奇と云ふべ
 く又妙と言ふべし
 ○幸村敵の心を推し投げ松明の謀計を以て大に奇手
 を破る
 上田龍城の役鶏卵及び火攻を以て奇手大に敗られしかば
 今の城を攻めんとする者一人をなく只身捕へふ予用心し
 ける然るが故に織田信長も今の大に恐怖て居られける所

徳川家康入來をしかば木に登び直ぐに請じて夫れより
 色々と軍議ありけるに家康申しけるハ某熟々案ずるに武
 田勝頼滅亡して後ち残れるものハ只此の上田なり然るに
 是れ程の小城を數日攻めて落すふとならざる時ハ天下の
 人ハ笑れ我々が武威を失ふに似たり然れば迎今更打接て
 歸すも功を一費に欠くと云ふをのたらん然るに因て今
 一度有無の一戦を試み當城を攻落さんと存するなり仍て
 再び總攻の義あらまはしと述べられしかば信長實に尤も
 ある仰せに候某も然か思ふなり然れども總攻を致しなば
 又々鶏卵を投出さんこと氣づかひしと申されけるに家康
 此度は竹策を以て楯とし鎧の袖を額に懸きて之を防禦さ
 堀に乘入得ならん何餘恐るゝこと候と申す事もなげに申

されければ信長如何様此議然るハ何分長澤留の本意に
 あらず政蒐るより外はなしと夫れより徳川家康ハ輕井澤
 の陣に歸りければ信長の直様笠ヶ城の北條氏政の方へ申
 送ふれ四月朔日寅の一刻よと政蒐んと用意せり借て又城
 中にてハ敵陣の彼是睡動するを見て再び總攻あらんずる
 あらんと急ぎ此由を與三郎幸村に告げ、ければ幸村聞く
 よりを櫓より上り敵陣を見渡し夫れより筒金六を呼んで申
 しけるも汝五六人の軍卒を引具し織田、徳川、北條の陣中を
 伺ひ來るべし筒畏まりて出行さぬ此時眞田源次郎信幸、弟
 幸村に申しけるハ先日鶏卵の謀計を以て敵を破ると雖も
 も再び用ゆるふと叶ぬまじ這般の汝何を以て大軍を防禦
 ぐや幸村笑て曰く盛成るときハ實と成り實成るときハ虚

を以て是る是れ兵家の活法あり先日煎砂に燃り果てたる
 敵兵此度の其用意あつんこと必定なり然れば此度の明松
 を以て投げ出すより外あるまじ其故の敵必ず目置を恐れ
 て竹束の猶を用意すべし然るに因て擲明松を用ひんと
 るなりと其旨未だ終らざるに筈金六立歸り敵軍の備へ此
 度は竹束を夥多しく用意せりと申しなるに予一座皆幸村
 が察まの違はざるを感じける然程ふ城中あり明松を夥多
 しく用意して櫓々へ積置き今や遁しと待掛けふりしに四
 月朔日寅の一刻に及んで織田勢の松本より徳川勢を經井
 澤、北條勢の笠ヶ城より上田の城下に陣々を押し寄一度に岡
 を作りて攻める其勢ひ孤城の只一渡しとふる見えければ
 家康命を傳へスハ打掛れと云ふ程ふるあれ竹束を荷ひ跡

ふて梅の太刀を提げ目置の鶏卵今や降り來るかと待付所
 ふ城中の銃り返つて音もせず寄手十分城に近づきし頃一
 聲の鐵砲響くと齊しく三方の櫓より明松を投げ出せば油
 を注ぎ去如き竹束は見るく炎々と燃上り寄手の者共驚
 き騒ぎ消んとすれど消えればこそ敵々になりて我れ先
 きふと敗走せるの實ふ可笑かりけることゝもなり
 奇正子曰く兵家の要は最初如何なる謀計を以て敵軍を
 敗りたる時の二度目ふ必ず之を防禦んと用意し來るの
 必定なり故に其二度目の用意の手術を推して之を敗る
 にあり又一方より之を云へば最初如何なる謀計を以て
 我々を敗りたり然るに此度の敵必ず我々が之を防禦ぐ
 の手術あらんとを察して之を敗るの謀計を廻らそふ

去故に我れハ却て其反に出で、之を破らんと討るにあらざれば兵家の要訣なり今幸村之を知りて密手之を知らず其勝敗固より知るべき所なり

○幸村、敵の反を計て大小之を破る

織田、羽柴の政權を争ふや真田父子は羽柴に舊恩ありとて之れに味方し兄弟出耳し織田方に屈せる諸城を落し遂に犬山の城に入りける爰に又北條氏政は此度の亂を聞て筒井順慶首鼠兩端を搦へ如何しけんとか考へしに多年交際厚かりし徳川家康にして織田方小味方したりと聞き岐度心を決まて四万五千餘騎の兵を率ひて長久手の陣に赴き家康に對面し夫れより清洲小至り織田信雄小對面し後援に出張ありしふとをゆされければ信雄大ふ悦び然らざる何

と予是れより犬山の城へ向ひ真田兄弟を攻落して秀吉が後を絶切り下されよと頼みける北條氏政心にて先年上田にての戦争に真田が智計手あみの程に懼れて所詮敵し難しとの思ひなれども斯く云ふこともならねば承知の由返答に及びて發向し先陣には北條陸奥守、同左京大夫、松田尾張守、大道寺駿河守等其勢四萬五千餘騎にて尾州犬山に出張す頃ハ天正十一年九月晦日なり斯くて此由犬山へ聞えければ城中にては由利淺香、穴山等の面々北條勢を微塵小さんと勢ひ勇みて有けるを幸村制して北條氏政假令何百萬騎を以て來るとも謀計を以て打挫ぐ時は矢一筋玉一顆だを費さずして退くべし各との如く討て出んどえり時ハ衆寡の敵し難き道理にて假令勝軍なすまでも味方を損え

る事幾何予や早まること勿れと一向ふ手當も爲すしてありける心の中ころ不敵なれ斯て北條勢は深尾の透ふ野陣を取翌夜討不意討の用心最と堅固になし合戦の明日と互に戦時を取定む然れども諸卒は只真田が謀計あらんを恐れ若しも地雷火の發りいせぬか何とやうん煙り臭しなど云合ひて安き心ぞなるりけり松田尾張守陣々を廻り夜討等を氣づかひ命を傳へて陣中騒ることを禁め武器兵器を取揃へ待居けれども何の沙汰もなく既に五更に頃ふ及びける際犬山城中に明松夥多しく輝かし連ねて見ゆければ偕に真田夜討を掛くるぞと銃に玉を込め弓に矢をひび楯板を並べ連れて今やくと待つ所に其明松初めの二百許と見えけるが次第々々に消失せて遂に全く亡くあり

ければ北條方大に怪しむ是れ真田が謀略あり定めて是れへ打て出でんか否々後より襲ひ來うん用心々々アラ怖らしやなと寒心ものにて待てども來らず彌々怪して居たりける中早や薄明と東も白と東天紅の鳥聲と共ふ既に夜も明放れて見れを穴な不思議やな真田勢一人もなく北條勢猶ほも不審暗れかね其日も終日合戦せず夜に至れを北條勢の前夜の明松ふ心をゆるさず今宵の如何と窺ふ所に同じく明松輝かせ然かも此度は其勢一萬もあつめと思われしふ北條勢今宵こゝろ安心ならずと片唾を呑んで待居けるふ又も明松次第ふ消え前夜に同じく終に一ツもなくなりしかば北條勢倦み果て偕々五月蠅明松かな寢るゝも寝られず勞れし眼を毎晩々々引きつられ迷惑千萬の事かなと

眩きながら其夜も同じく寝ること叶はず終ふ拂曉になり
 ければ今日こそ合戦ならんと各々勇んで敵の打出を待
 ちかけしふ更に様子だにもあらざれど北條勢今の勢れ果
 て那なれば真田斯く人を惱ますや儲々難儀に當りしこと
 かなど嗷々云ふも理とあり斯くて北條勢の兩夜まで眠ら
 れざれば次ぎの夜へ堪へかね去來や今宵は寝らんと枕に
 就んとする所に陣觸厳しく今宵を又々眠られず是非あく
 扣へ居る所に又始じまつた例の明松焚くとも消えとも
 勝手次第と早捨置きて見もやらじ假寝などしてありし所
 に鯨波聞えければ儲ては今夜の討出しか其れ防禦げ退散
 せよと手ぐすね引て待てども宛ら狐狸の妖怪の如く跡方
 なくなりけり斯の如くなること既に七晝夜に及びけれ

バ北條方の諸卒身心憔悴して戦ふ心をあく頻りに歸國を
 思ひ出せしよと誠まことに真田が詭計いつはりの圖はなに當りしなり然程に
 軍奉行松田尾張守、民政が前に出でし申しけるの先年武田
 勝頼、沼田の城を築きし時味方真田に追立られし謀計此度
 の事小同じけなり是れ逸を以て勢を討んとするの謀計な
 り然れば此度の新様々々に致し候方然るべしと耳小就て
 私語ひそかごとければ氏政手を拍うて歡よろこび是れハ良計よきはかりごとなりと夫れより
 北條陸奥守に一萬餘騎を授けて畚くわ々く谷や々に埋伏まい伏させ北條
 勢悉く東國に歸ると沙汰して陣々を引拂ひかせ衛立まもりたてを堅固
 よして相州指して引退ひきしりぞく此事、大山に聞ゆければ真田伊豆
 守大に歡よろこび夜々謀略まろくに厭忌いと敵本國に引退くと見ゆより
 勢を討つハ此時なり者共進めと既に用意を調へたる所へ

與三郎幸村出來と制して申しけるハ明松を以て夜々敵を欺きしこと先年父昌幸が屋布に於て用ひえ謀畧なれば敵方の能く知る所あり然るを今又行ひしは敵方之れに就て立る謀計あるべし其れを種とし此方より之を破らんとせしあり信幸大に驚き然れば如何して破らんや幸村聲を潜め斯様々々なりと叫びなれば信幸打點頭誠ふ汝が謀略某が及ぶ所にあらずと夫れより手分に及びける此事北條方には夢ふも知らず潜に一萬餘騎を埋伏し残りハ皆東國へ引拂ふと見せ掛退きつ、今や来るならんと静ふ打立し所ハ真田勢三百餘人鯨波を作りて追來りし故北條勢スハと見れども餘りの小勢小疑ひながらも戦ふ所追手の大將淺香郷右衛門大音に呼はり見苦敷も北條方にハ一戦の手合

をなく敵小後を見せ給ふか引返して勝負なれと霧地暗小討て掛るを大軍の北條勢豫て工み一策あれハ一支にも及ばずして嵐小木の葉を散まが如く造作もなく敗軍しけれを淺香彌々氣に乗て追行く所に一聲の鐵砲耳根小響くと齊しく北條の伏勢一度に起り淺香を中に取圍む郷右衛門少しも騒かず振ふて戦ひしに今迄敗せし北條勢謀計圖に當りしと咎々勇みて爰を専途と打掛れば流石の淺香も前後の大軍又圍まれて既に危く見えける此時幸村城中より敵の伏兵起ると聞き淺香を討たず早く淺香を救ひ來れと由利鎌之助、穴山小助に命じ舍兄伊豆守、木辻別右衛門、を始発とし望月、増田、箕、相下、根津等諸共間道を経て北條勢の後に討て出で鯨波を作りて攻めければ北條勢大に驚

き慈に淺香を圍みしが邪魔となり前後に亂れ狼狽騒ぐを
眞田勢は之を見濟し長追して益なまると凱歌を擧げて歸陣
す北條勢と偶ま歸て敗走し織田の加勢に來りまも空しく
小田原にぞ歸りける

奇正子曰く既ふ一度用ひたる謀計を又再び用ふるは是
れ先づ敵をして計らしめて其反を計らんが爲めの謀略
なり今眞田が用ふ所即ち是れあり名將の兵を用ふる多
くは茲ふあり後の兵家宜しく鑑るべし

○幸村、竹皮、熱粥の謀計を以て大に奇手を破る
天下東西に分れて豊臣、徳川の關ヶ原ふ兵を交へるや徳川
家康の東海道より進み其子徳川秀忠は中山道より進まん
とせしに眞田昌幸及び幸村の大坂方に味方し中山道より

進まんとせまに眞田昌幸及び幸村は大坂方に味方し中山
道より進む秀忠を上信の間ふ支關ヶ原の合戦の間は合
ざらしめ人と謀漸々退いて上田の城まを籠りける偕又秀
忠と諸將を集めて評定に及び愈々總攻との事に一決し夫
れより翌日十二萬餘騎早天ふ上田の城を百重千里ふ取圍
み楯をつ死竹束を出し我れもくと既に城際にまで押寄
せ鯨波をドツと作りけれども城中には鳴を靜めて取合は
されば其れ掛れと云ふ程ころあれ我れ先きよと空堀ふ飛
入々々堀を乗越んとしける所に城兵共堀の上に立現れ豫
て用意せし竹の皮を幾許とあく投出すを寄手ハ更に事と
もせず拂ひ除くして進みける所ふ長き柄杓にて燃騰りし
白粥を注ぎ掛けしに其白粥軍兵の鎧武具の隙間より肌

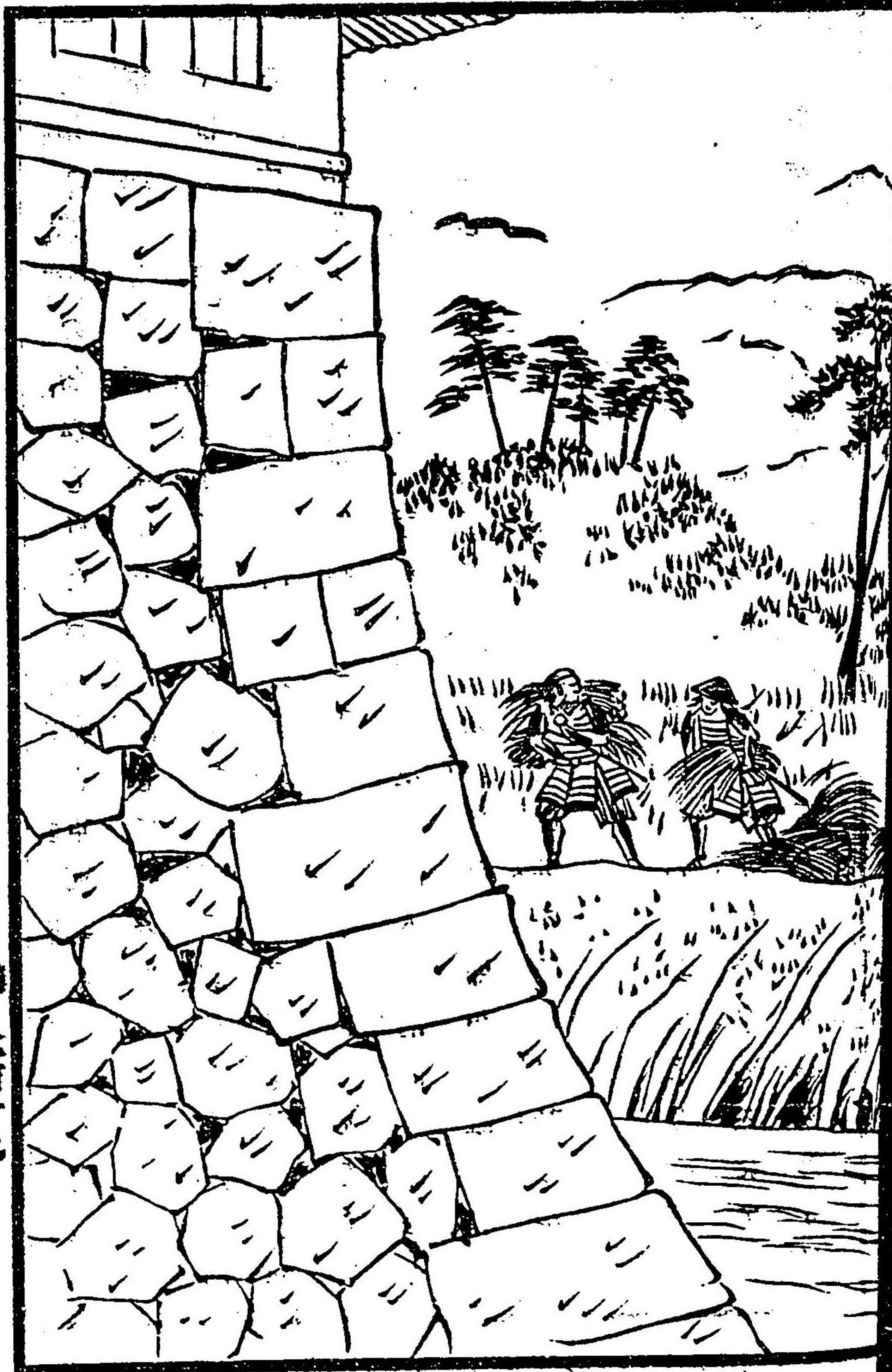
竄透軍兵共は熱に耐え兼ねアナ苦しやなと遁出せば先きに投捨ありし竹の皮ふこり人馬共ふ焼爛れ本陣まで一帯も熱粥の爲免ふ總身爛れて苦しむ者多ありけり是に依て關東勢は關ヶ原の合戦に追付くこと叶はず心ならずも上田の城下ふ集りて徒に日を送りける

奇正子曰く本計は實に奇と云ふべく又妙と云ふべし其奇妙極て余之を評するの言葉なし

○幸村、稻荊陣

徳川秀忠十二萬餘騎を以て上田城を圍みしに竹皮熱粥の謀計を以て寄手大ふ破られしかバ只徒ふ小城を圍み居たりける諸將は氣を屈して何卒早く事分れぬれかしと思ふ

所に城中にては此時眞田父子敵の疲勞れたるを察し部卒を數多城外に出して早稲田ふ赴かしめ稲穂を刈取せし寄手の面々是を見て借ては城中には兵糧盡きたると覺えたりイテ追駈けて討取れと云ふまゝに大久保、本多一萬餘騎にてドツと吶喊押寄する此時諸卒は稻を刈取り束にちして背負立さんとする所なれば徳川勢の追駈來り去者道を塞ぎて聲々に呼はりけるは不敵ある哉城兵共此大軍と引受けて稻を刈んとし不覺なりと云ふ儘ふ切て蒐れば部卒等何かは以て堪るべき蒔りたる稻を打捨我れ先にと城中へ逃入りける寄手大に笑ひ借々迂濶なる城方の振舞かち拙くも此有様と口々に罵詈りながら打捨てたる稻束を本陣に持歸りける斯くて夜に入り人々眠ふ就んとする



幸村
の
稻
陣

時頻ふ焔焔の匂ひしければ不審と東西尋ね回りし内盡の軍も取歸りし稻の束より火燃出して陣々に移りければ偕ては又眞田が謀計ふ當りしと急に狼狽騒ぎ出しける所も城内よりの三方の城門を叩き一手は眞田左衛門佐幸村を始免として三百餘騎又一手は穴山小助を始めとして同じく三百餘騎又一手は三好新左衛門入道清海を始めとして同じく三百餘騎三方より攻寄せければ關東勢誰れ戦へんとする者なく皆々小諾を指して敗走をるの見苦まかりけることいもなり

奇正子曰く眞田が稻を焚て敵に奪はせ其稻より火發りて敵陣を焼きし謀計は稻束の中へ火薬を仕込まにて之を幸村が稻蒔陣とい名づけたり等と云ふも餘りあり妙

と云者餘り有實に奇々妙々珍々稀有の良計と云ふべし

○幸村、一時反間の謀計を用ひて大に敵軍を破る

豊臣秀頼の大坂ふ旗を揚げるや徳川父子天下の諸侯を率て大坂城下に集る偕て城將眞田左衛門佐幸村の細作を出して敵の様子を窺ひしむるに南の手は神保長三郎、一柳監物、分部左京太夫の三將扣へたる由告げ來りしかを幸村然らむ先づ奇計を運ぶし敵の膽を奪はんすらんとて豫て用意の無紋の旗を取出し手自神保、一柳、分部の旗の紋を盡き由利録之助、淺香郷右衛門青山彌十郎、増田九郎、同荒次郎五人の手に分部が旗を持たせ其勢三百餘騎又一手は海野六郎兵衛、木辻別右衛門、同元之助、別府若狭の四人にして神保が旗を與へ其勢同じく三百餘騎又一手は明石又七郎、三好

清海入道、同爲三、貫金六、の四人に於して一柳が旗を渡し其勢
 同じく三百餘騎皆何れも大坂を申の刻小出立ち山の手を
 廻り間道を越して進み行く且つ又木村長門守重成塙團右
 衛門直行、蒲田隼人兼相の三人小の三千餘騎づ、の兵を與
 へ大砲を用意して向むく南都に向はしむ然程に關東勢を
 悉くことゝハ露知や明日ハ大坂へ出張して土地の見爲
 せんものをも勇氣凛々として終夜酒宴を催したる所小眞
 田勢の中より由利鎌之助三百餘騎を率ゐ分節が旗を指し
 神保が陣小押寄せ陣を揚げて蒐りければ驚破夜討を蒐け
 たり者共も辨れける所故由利鎌之助大音ああげ神保長三
 郎能く聞け汝ハ先君秀吉公の大恩を受へながら關東に從
 ふき去ふことあるべきや分節、一柳と心を合せ速小家康を

圖り大坂方小參るべま若し此事聽入ざるふ於ては汝を誅
 して罪を三族に及ぼさんと呼ひまければ神保長三郎之を
 聞て大小驚き偕は分節、一柳ハ敵となりけるよまど俄に騒
 ぎ出す此時海野六郎兵衛同じく三百餘騎みて神保が旗を
 指して分節が陣小押寄せ神保、一柳ハ大坂に同意して關東
 勢を討んとするありと呼ひりければ是れより陣中大に騒
 動し同士討のみ予致しける此隙より一手の軍勢敵の本陣大
 門坊に押寄せられを陣中大に騒ぎ神保、一柳等逆心せま
 呼はる聲の聞にしに家康大小驚き偕ては此三人變心せま
 よなと呆れし其内に早大門坊の八面より火と炎々と燃上
 り中より神保、一柳、分節の三將旗を翻へして此處に顯はれ
 彼處に隠れ千變萬化の秘術を盡くして観ひける偕て眞の

神保と分部が逆心なるふとを知らせんと先陣へ馳行く所に早本陣は一圓の火とあり其上我が紋の旗散々見え神保長三郎是にありと名乗を聞て長三郎は大ふ驚き偕て分部偽旗を用ひ我れを逆心の者と見せかけ己れ甘々謀叛の意を達せんとせしあらん憎き分部が振舞かなと切齒扼腕怒り立て居たる所に彼方より一人の武者來り其處に扣へし如何に神保なりや汝不忠にも不意に變心まで大恩を蒙りし家康公を討んとせしな天我が手を以て不忠者の汝を誅せんと爲す予早々に首を渡すべしと呼ぶは京極修理之助なり神保大に怒り我れ何として謀叛を爲さんや邪みそ分部が所爲なり憎むべきの彼れありと云へば京極ハ肯はず汝我が勇力に節れ備るども何條偽り果せんや謀

我が偽りもあるなすは尋常に懸りて引あるべし然なく一討に鐵腰を懸掛りて神保辨解言談小差通り口惜みあら馬に鞭打ち通行し予愈々神保逆心の者と呼做れしなり分部、一柳も其の如く互に疑ひつ疑はれつ同士討なすこそ是非もなま欺りける所に木村長門守大砲を打懸々々攻めれを家康大に驚き遁んとて五百餘人にて奈良を指して打立れしに傍らより分部が紋の旗を指して白利録之助進み出で家康公何とて敵小背を見せ給ふ予や返し給へと呼ぶに給を捨て荒れば西尾豊後守、近藤登之助、竹原山城守二百餘騎取て返へして敵々に渡り合ひ其間小家康危き所を避れて走りしに又森の蔭より神保が旗懸れ林の蔭より一柳が旗現れて海野六郎兵衛、三好入道六百餘騎

にて討出づれど家康案外の事に唯だ一騎敵の隙間を窺ひ
 馬に任せて漸々三丁許遁び延びける跡に、其田勢徳川の
 旗本勢を敵手とあして火花を散まて戦ひける家康ハ辛ふ
 玄て虎口を脱れ只恐しと計りにてホット一息を休ませ居
 ける所、後より誰やらん進来るに家康怪まながう振返り
 て大久保なるか成瀬なるのと聲かけしに彼の武者荒雨と
 打笑ひ否々味方ふあうす我れハ舊信州上田の城主たりま
 具田左衛門佐幸村なり我れ此處にありて君を待つこと久
 しイサ御首を申請んと呼のりれば家康大に驚き前無三
 寶と仰天せられ跡闊して遁れしハ危かりける事共あり家
 康は汗馬に鞭打ち頻りふ走りしに後より幸村鎧を取て追
 越け來り返し給へと呼りつゝ進み寄て待たる鎧を取延し

突進たりしに家康の運や強かりけん狙ひ下りて鞍轡を突
 くこと三四度なり家康ハ生たる心地なく日頃駿足と思ひ
 し名馬も今と同處を廻るやうに思ハれ殊に前ハ深き溝に
 て行くべき道外になれば危ぬ時の神懸心中深く八幡大
 菩薩を念じ鞭を横に兩角入るればまッばころ善かりけん
 其馬忽ち一丈許の溝を飛越向に難あく立けるが幸村續い
 て飛越ぬしに馬諸共ふ水の深みへ落ちければ幸村急ぎ馬
 を引揚げ見れを夜ハ既ハ曉方となり家康何れへ行かれし
 か知れされば是非なく城中へぞ引取りける
 奇正子曰く劍道鎧術ハ固より馬術ハ至ても其極意の妙
 所ハ遠するハ幸村遙ハ家康の右ハあり然るに家康の飛
 越したる溝を幸村飛越るふと時ハずして水の深みに落

しは是れ天なり命なり人智人力の及ぶ所にあらす孔明の所謂事を謀へ人により事を成は天ふありと云もの耶
○第二十二章 徳川家康

○家康、彼れに向ふの體を見して此れに入る
文祿初年の頃、今川義元威勢盛にして四隣を震ひ、今の上洛こそせやと思ふて打立ちけるに、路々の諸侯皆風を望んで靡ける。其中に織田信長一人之れに従はず。是非に一合戦なしたる上にて、其路を開かばやとて尾州鳴海の邊に七ヶ所の砦を構へて持ちかけたり。然るに尾州大高の城も今川方、鶴殿三郎長持と云へる者居たり。此方は織田方、丹下には水野帶刀、善照寺ふて佐久間左京、中島は梶川、鷺津は飯尾近江守宗定、又丸根は佐久間大學盛重を置き

て、其外寺部、學母、廣瀬も皆ありて、今川方にて大高へ兵糧を入れ、なを鷺津、丸根ふ於て貝を吹くを相圖に、寺部、學母、廣瀬の諸より馳集り、丹下、中島より後詰をべしと定め、くれける義元、家康の許に使をもて大高ふ兵糧を運び入れらるべしと申送し、しに家康心得候と云ふて、馳て打立ちけるを、酒井、石川等信長の手配り嚴重にて候へば、中々大高に兵糧入れんこと思ひも寄らずと申せども、家康更に聞き入れず。我れふ謀計ありとて、先づ兵を分ち、福釜の松平左馬助親俊、酒井與四郎忠親、石川與七郎等四千許、永祿二年四月九日の夜半、大高及び鷺津、丸根を臨に見なして、寺部の砦へ押寄せよと命し、自ら八百許りの兵を率ゐる兵糧米を馬ふ取積せ、大高の城二十丁許、此方に扣へたり。先鋒と早や寺部の

岩小押寄せ城中騒ぐ所を一の木戸口打破り火を掛け又梅
 坪に押寄せ三の丸まで攻入り火を放ちて焼き立る其煙天
 を焦し関の聲響き渡りて聞えければ丸根、鷺津より之を見
 てスハ三河勢遣々と蹈越て攻入りたる予如何様故ありと
 覺ゆるなと疾々後詰せよとて寺部梅坪に予駈向ふ其間小
 家康は塵を取りて米を負せたる馬一千二百匹打連れて事
 なく安々と大高に運び入れにける丸根、鷺津に殘れる者共
 は之を見て妨害あさんといまたるなれど大概の後詰小出
 で、其勢少なく如何とも詮術なく見すく大高に兵糧を
 入れさせける家康ハ馳て軍兵を引き纏ひ岡崎へ歸城をし
 てけり人々今宵の謀計等関の及ぶ所にあらずと申しけれ
 ば家康是れ甚だ知り易き手術あり先づ思ひと寄らぬ寺部

梅坪を攻めて火を掛り丸根、鷺津の軍兵を後詰に出でさせ
 引き逃へて兵糧を運び入れたりしなりと聞て人々舌を巻
 て驚き合ひふける時に家康十八歳あり

奇正子曰く淮南子稱を將に西せんとして之れに示すに
 京を以てと今此謀計即ち是れなり

○家康戰はずして人の兵を屈す

徳川家康、小牧長久手の軍に勝ち尾州、蜷江の城主前田與十
 郎を攻めなんとて城下に打向せられける所に敵方の加勢
 多く來りて城中に入らんずらんとするの體を見て早々味
 方の勢に令して敵れ加勢城中に入らんとするを妨害する
 こと勿れ如何程ありとも自由自在に入城せしめよと申す
 を酒井左衛門尉忠次承て訝しく思ひ何とて安々と入城致

させんと申しつるを信城の固より堅固なるも今又多勢
 籠りおぼしき攻落すことを得ん長しや攻落すことを得
 べしとあるも甚だ難儀なるべし君に如何なる思召の候
 ぞやと同ふを家康は冷笑ひ謀計は密なるを以て貴しとす
 未だ事成らざるの前何とて語るべきや早々諸軍に令れ
 て由断の體を見して入城せよと云ふに不忠次心なら
 ずも諸軍勢に令れを傳へて由断の體を見しければ案の如
 く大勢續々として入城したりけり其後又援兵船よて來り
 ける時始めの氣色何處へやら俄に打て變て其援兵を退拂
 せたり人々其何の意たるを知らず斯く數日を経ぬるに
 城中忽ち兵糧盡きて降人ふり出でにけり是れ城中兵糧乏
 乏と家康疾より之を知りつるなれば軍勢加はれば其

兵糧に事を欠くると益々甚だしかるべし故に家康の利と
 する所の敵軍の多きにありて其少なきにありて然るも加
 勢の城中に入らんとしつることなれば心中密に悦びを爲
 し如何にも由断の體を見して加勢を入城致させて時へ置
 けたる兵糧を早く食ひ盡くせしめんと計り其後の援兵の
 之を追拂ふて糧道を絶て城中に兵糧を入ることあからし
 めたるもの善く其圖に當り案の如く兵糧盡き取らして
 人の兵を屈えたるなり
 ・奇正子曰く兩虎闘ふ時の一虎は死して一虎は傷く故に
 孫子曰く百戰百勝の善の善なるもの非らず戰はずし
 て人の兵を屈えたるもの善の善なるものありと今徳川家
 康の壁江の城を降すことを即ち戰はずして人の兵を屈し

たるものなり實に善の善なるものと云ふべし

○智將奇計鑑前編終

○智將奇計鑑後編 支那

◎第一章 孫臏

○孫臏、滅衛増兵の詭計を以て龐涓を討つ
魏の龐涓、韓の國を攻めし時齊の國より孫臏を大將とまて
韓の國へ救の加勢に遣はされしに孫臏兵法に遠見を欲し
必す近を撃つと云ふふとあるを思ひ韓へへ行かずして
其隙を規ひ却て魏の國へぞ押寄せたる龍涓此山を聞き付
けて本國へ取て返へしけるに韓隨と云へる者龍涓の前に
進み出で、曰く我料るに齊兵久しく出で兵糧必ず盡し
我れ遊士とありて孫臏が陣に至り其兵糧の様子を窺見ん
若し果えて兵糧少なかつんば味方堅く陣を守り奇兵を

出して其兵糧の道を絶ん然れば一月を出でずして二十萬の齊兵皆大梁に死せん龐涓大に悦び此計能く我が心に叶へりと云て韓隨を齊の陣に往かす韓隨の扮て遊士とあり布衣短袴にして直ちに孫臏が本陣に投り怙を具して謁見せんことを請ふ孫臏其姓名を見て諸將小謂て曰く韓隨此處小來ると遊説ふらるるで我が陣中の様を探らんが爲めあり我れ謀計を決して龐涓を斬らんと思ふの所折りも折り此人來ること極めて我が謀計に中れりとして陣中に十萬の籠を作らせ其の兵糧の盡く之を匿して蓋砂を兵糧の如く仕立て能く之を視れば蓋砂たることを知るに足るものとて然して後ち韓隨を召す韓隨陣屋に入て孫臏小見て種々談論するの末韓隨が言葉の中齊軍糧盡ん然らば

魏を下せよと殆かど難からんとこの事を申そよ孫臏色を正ふして曰く我が兵糧山の如き我れ二十萬の兵を擁して大梁を破らんことを目前にあり我れ試よ子と共に之を見んとて遂に韓隨が手を携へ逼る陣々を巡て武具兵糧等を見せしむること既に畢て曰く我が兵甲鋭く米粟滿るを見よ之を以て魏を下さん誰か破れ難しと云ふやとて陣を出づるの所小先鋒遠達來り詐りて曰く兵糧既に盡きたり謀主宜しく早く處置すべし孫臏叱て曰く軍中の米粟積むこと山の如し何ぞ糧盡れたりと憂るや韓隨之を聞き相辭して去る孫臏遂に三軍を分して夜密に師を班む田忌が曰く魏を破らんことを目前にあり何んぞ師を班むるや孫臏笑て曰く是れ柔弱を以て魏に勝つことこの舉なりとて大軍速

小陣を拂て東齊の方に向て去る然程小孫隨曉の陣小歸るに龍消其勳靜を問ふ韓隨答て曰く孫腹外か辭を堅くすと雖ども内ち師を班むの意あり龍消が曰く何を以てか之を知るや韓隨が曰く我れ陣々を巡て之を窺ふ小兵粮盡きたりと見へて積む所のもの米粟に仕立ありと雖ども實ハ蓋砂なり必ず其師を班免んふと近きにありと其言未だ訖ざるに哨馬來て孫腹密々に師を班むと報す龍消さてると韓隨が云へいふ遠てアイザ追撃んとすれば龍英が曰く孫腹詐りの謀計多し輕々しく退ふべからず龍消敢て從ひて兵を率て齊の陣小打入て見れば兵粮に仕立てたる蓋砂捨置きありて中ふハ蓋破損れて砂石出でたるものありけれを愈々韓隨の云へいふ遠のずとて又陣々の寇の數を算へ

しむるに大約十萬あり龍消が曰く十萬の寇焉んぞ能く遠く粮を繼んやとて兵を催して急に追ふ孫腹は獨孤隙を後軍として處々に馬を返へし敵を迎へて勝つことを要せず只敵をそびき引かまめ既に退くこと五十里支那の一里は六丁なり故に支那の六里を以て我が日本の一里とす今此の五十里を日本の里數に直せば八里強あり以下皆然りと知るべし若し之を服膺せずして見る時ハ頗る里數の長に疑ひを起すことあるべし能く心得べし小至て陣を取り滅して五萬の寇を作らし免て去る獨孤隙之後陣にありて且つ戦ひ且つ走ること二十里龍消追至り齊の寇の減りたるを見て掌を拍ち大に笑て曰く倍てもく齊の師は弱きものと哉我が國へ入りて未だ三日を過ぎざるに最早其勢の

大半を亡ふ期に弱敵の透さず退詰て悉く討取るべしとて
 歩立の者をば棄て置き駿馬の武者をかりを引き具一急ぎ
 周章て退散たり齊兵蟠龍山の下に至る孫臋地圖を取出し
 て之を見るに此を去ること八十里にして地あり馬陵道と
 名く路險しくして林樹叢密なる處なり孫臋の固より名將
 のことなれば龍消が斯くあらんことを兼て察し今日の何
 時には何れの邊まで來らんと云ふことを量り日暮の比
 の馬陵道まで到るべしと思ひ此馬陵道の伏勢を置くに然
 るべしとて田勝、田忌をして各々五百人の勁弩を引た一弩
 毎に百枚づゝの箭を帯して馬陵道の兩傍に夾伏しめ又小
 卒を去て大なる樹を斫削して道をぎま塞がし先其木を削
 りて龍消死此樹下と云ふ六字を大書し目に觸やうふして

樹下ふ火の光り起しん時を待て一同ふ弓弩を發たんと
 を以てし又獨孤陳、田盼をして各々本部の兵を引た馬陵道
 の後五里に埋伏せしめ待て魏兵の馬物の具を奪んふとを
 以てす諸將各々計を受けて去る又陣中滅して三萬の寇を
 作らし先自ら遠達と共ふ後軍にありて緩々として退く龍
 消退て馬陵道の口に至りける時天色既昏くして齊兵の
 寇を數ふるに漸く三萬あり龍消悦んで速に前む諸將皆日
 く前に馬陵の險阻ありて恐くと埋伏の勢あふん姑く明日
 を待て退ふの方然るべし龍消道の傍の百姓に齊兵此を去
 ること幾里かと問ふに百姓が曰く前軍ハ昨日既に陸續と
 して去れり獨り孫臋の車後軍にありて去るふと二十里ふ
 過ぎし龍消之を聞て諸將に謂て曰く我が兵今夜退至らん

こと三十里ふいて孫臏を得ん小爾等何んぞ狐疑するやと
 て兵を催して追蒐ること十餘里先鋒龍葱回り告げて曰く
 行先道路險くまて馬進み難し夜明けて追んふあどか遅し
 とせん龍涓叱て曰く功を建んこと目前ふあり馬通らずん
 を歩立ふありて追ふべし諸軍兎角して難所を越て又追ふ
 こと十餘里然る所小前軍回り來り前小大木道路を塞で通
 り難しと報ず龍涓又叱て曰く先鋒何んぞ早く截り開て進
 まざる小卒が曰く彼の木ふ一行の文字あり暗くして辨へ
 難ま元帥之を驗給へ龍涓明松を照し之を讀で心中大に驚
 て曰く我れ孫臏が謀計に中れり速く軍を回すべしと云ふ
 程ころあれ田勝、田忌樹下の火の光を望み見て萬弩をつ
 るべ放たしむるに其箭雨霰の降が如く何か以て墜るべ

き龍涓遂に堅子が名を成せりと云て痛手を被むりて萬弩
 の下ふ死を龍葱後陣にありて進行く所小前軍馳回りて元
 帥弓弩の下ふ討れぬと報ず龍葱大に驚き涙を流して屍を
 救へんとするに金鼓大に震て齊兵四面ふ殺出す又魏軍於
 てハ鄭安平と云ふ者龍葱、龍葱の二將を保けて殺出屯田盼
 獨孤陳其路を遮り五馬戦ひを交へて田盼遂に鄭安平を斬
 て落ゆ龍葱、龍葱命を棄て、走る徐甲も後へに従て走る所
 に獨孤陳後より一聲大喊て徐甲を斬て兩段となし行先を
 截り止むれを魏の兵各々拜伏して降る者其數計ふれざり
 ぬと

奇正子曰く淮南子稱を兵を用ふるの道之れに示す柔を
 以てして之を向る小剛を以てし之れに示すに弱を以て

して之れに乗る小強を以て一之れを爲する小欲を以て
去て之れ小應するに張を以てす云々と今孫臏の之れに
示を以て少きを以てして之を迎るに多きを以てしたるもの
なり孫臏の能く兵法に通ずと云ふべし

○第二節 田單

○田單、火牛の謀計を以て大に奇手を破る

燕の昭王、樂毅と云ふ大將を遣ひして齊の七十余城を下し
たるに莒と云ふ城と即墨と云ふ城兵未だ落ちざる内小昭
王死して御子惠王の代になりける比惠王と樂毅と不和な
りければ即墨の城に籠りし大將田單此由を聞き及び婦な
きことば思ひ如何にもして愈々不和ならしめ名將の樂毅
を用ひなればやうませばやと思ひ密に反間を放ち燕の國

へ遣ひして云はせぬるの樂毅七十餘城をさへ容易く下だ
せしに唯二つの城ばかりになり年月を経て未だ攻め落さ
ざるに惠王と不和なる心さるゆへ小陽向に攻る體を見
ずも内心に逆心を抱くが爲めなりと諸々に云ひ降らせ
しかば惠王此由を聞き付け大に怒り騎劫と云ふ大將を遣
ひして樂毅を代はらしめける田單城中の人々に申付けて
毎日食する時其食物を庭前に備へて面々の先祖を祭るべ
しと申されければ何時も仰せま従ひ祭りける也へ庭前の
食物を喰んとて雲中より鳥共數多飛び降る程に田單
又密に人を燕の陣へ遣ひして即墨の城ふの神明天降らせ
加護しなふ故に毎日御遣せし矢の鳥飛び降るありとぞ云
ひ降しける是れは後に奇怪なる計を施して神明の所爲を

うんと敵に怪ませんが爲に豫め其の下組を爲せるなり
 又密々と云ひ降らしけるの御方の軍兵敵に降参ま又ハ擒
 ふせられたる者其の鼻を悉く切り前に押立て攻先來トば
 即墨の兵共ハ足も腰も立つまじき事すと云ひ又ハ城廻り
 にある墓共を掘きて我が先祖の屍を晒さむ猛き心も弱り
 果てなんぞ云ひ合へりなれを彼の燕の愚將之を聞き及
 び賊ぞと思ひ先きに降参せし者又ハ擒にせし者其の鼻を
 切りて前より立て又城の廻りにある墓共を掘きて屍を取り
 散しける故即墨の軍兵之を見て大に憤りを發し是非共一
 合戦仕と此面目を雪がんと思ひ先づ敵の方へ使者を遣は
 し此上は力及む次第あれば降参仕るべしとて究竟の者

共ハ皆々歳々置き女童部年老へたる者共などを外へ出
 又密に即墨の大百姓に多の金銀を與へ此金銀を汝等が方
 より燕の大將へ送り我が一族共を御放しありて亂妨し玉
 ハぬやうよと願むべしと申付しに彼の百姓令の如くはぞ
 しけれハ愈々降参疑ひなしと思ひ油断する程に田單半を
 千疋をかり引寄せ布を設せ紋ハ龍を畫き五色にて色取
 リ兩の角にハ劍を結付け柴に油を澆ぎて尾に懸り付ハ五
 千人の精兵を撰りて夜に混れて牛の後よと出ま馳て機時
 を謀りて一度ハ彼の牛の尾に火を付ハせければ千疋の
 牛共尾の熱きに苦み敵陣へ荒入り狂亂しける也ハ燕の陣
 中大に騒動し上を下へと混亂し龍の紋ある怪ハき物の陣
 所皆切るを見て更に合點行かず十方を失ひびる所を

田單火
と放て
奇手と
破る



後より續く五千の精兵平討に討ちければ燕の軍勢大に敗走して遂に大将驍劫も討れけり初め神明ふ託せたりしに此火牛の計を用ひんが爲めにふそ

奇正子曰く奇計の一時の考へを以てもするも尙ほ且つ利勝を得るの其常なり況んや田單が奇計の一朝一夕の考へにあらざる深く考へに考へを重ねて施せるものされむ其敵を敗ること亦宜なりと云ふべし

○第三節 鐵傳鐘

○鐵傳鐘 灰と豆と火とを以て大に吳軍を破る
鐵傳鐘、吳を討ちし時水戰をしけるが順風に灰を飛ばせまかば吳人目を開くこと叶はず十方に迷ひし内に間近く船を濶寄せ我が舟に砂を積せ敵船への豆を投げ込ませける

が互に鋒を交へ突きあひ叩きあひ内を破る血しは彼の豆を浸し滑りければ吳の軍兵共足を踏み立つることあらすして倒れ頓ぶ所を遂に火を投げ掛けて焼殺するところ隣れなれ

奇正子曰く灰を以て目を攻め豆を以て足を攻め火を以て全體を攻む此の如くにして敗れざるものなし鐵傳鐘能く兵を用ふと云ふべし

○第四節 韓信

○韓信 背水の陣を以て趙を破る
韓信の趙を攻むるや趙に謀士廣武君李左車と云ふ者ありて能く奇妙の計を用ふ韓信の攻め来る由を聞て趙王趙歇に向て大王と唯溝を深ふし壘を高ふして固く守り給へ臣

は三萬の騎兵を領し小路より敵の後へ廻りて其輜重を絶
 ん然るときは韓信進んでを戦ふこと能はず退ても歸るゝ
 と能はずとの計を薦めしかども趙歇既に二十萬の勢を整
 へて井陘まで出張して李左車の薦免ふ從はずイデ城外に
 て一戦せんずとの勢なるに漢の細作此事を聞知て急ぎ
 馳せて委細に告げ、れを韓信大に喜び左らに打寄んとて
 夜半に手配を定めて騎卒二千人を撰て汝等密に小路より
 廻て山中に埋伏し趙の兵、城を空しくして出るを見れば急
 跡へ廻て城を乗取り趙の旌旗を悉く拔棄て漢の赤旗を立
 列ね緊しく守て動くゝと勿れとて又諸軍勢に向て汝等今
 日の合戦ハ必ず心を忽にぞること勿れ早く趙を破て城中
 にて心静に兵糧を使ふべきとて立ちながら僅かな食を

與へければ皆驚き怪まぬ者とはなかりけり韓信ハ未明
 に打立て先づ一萬の兵を分けて綿蔓水と云へる河を背に
 して陣を取らせ張耳と共ふ大將の旗を具先に進め鼓を打
 立て攻龍れを趙の兵打て出で稍々久しく戦ひけるが韓信
 張耳兼ての約束なれば旗鼓を打棄て詐り負けて散々に逃
 走れば趙の大將陳餘諸軍を令して敵を大河を背にして陣
 を取りたるを急に追蒐りて悉く河中へ突落せとて大軍一
 度に喚て蒐りしが路に旗鼓を捨てたるゝと足の踏處もな
 かざしゝるを趙の兵俄かに徳づいて我れ劣らじと争ひ取り
 ける間に韓信ハ行方なく逃失て思ひも寄らぬ漢の大將曹
 參、樊噲、周勃、欽、賈、四人、大軍を令して掩殺し一足も退く者は
 忽ち首を斬ると喚き叫んで蒐立て、かば趙の兵大小亂

れ騒ぎ立一支を支へず我れ先きにと城下まで逃歸り早く
 門を開くと呼はりけるに城中更らに人音もせざりしかば
 皆心怪んで橋の上を望み見れを夥しく赤旗を立列ねて漢
 の軍勢きら星の如く並居たり趙の勢も大膽を冷し上を
 下へと騒動して互に陥合ふて死せる者數を知らず陳餘大
 に怒て忽ち斬殺せしかども大軍の亂れたる習ふて更ふ鎮
 らず彌々亂れ立て逃んとするに早や漢の大軍野に充ち山
 に漫りて出來り須臾の間ふ四方を百重千重に取圍んで緊
 しきこと氷も漏ぎぬばかりあり陳餘の死力を振ふて左に
 突き右に當り前を衝き後を打てども出ること能はざりし
 かば長嘆して立たる所を灌嬰後より馬をづと馳寄せ只一
 刀に斬落して了る趙王を擒ふしげれば韓信乃ち軍を收め

直ちに城中に入て兵糧を使ふ諸大將皆抱ふ拜伏して申し
 ける兵法に山陵を右にし背にし水澤を前にし左にすと
 云へり然るに元帥今日氷を背よして陣を取り却て大に打
 勝給ふは如何ある故ぞ韓信が曰く諸將知給はずや古より
 之を死地に陥れて而して後に生き之を亡地小置て而して
 後に存すと云ふ事あり御方の兵は皆俄か小諸方より馳集
 りたる者なれば曾て訓練せず是れ所謂教へざる民なり調
 練せざる兵と敵に逢て逃げ易し故小若し之を生地小置か
 ば皆走去ん我れ此の故に大河を背ふして陣を取りければ
 諸軍皆逃ること能はずと思ひ後に退て水に溺れて死なん
 より寧ろ前に進んで潔く討死せんとして皆命を捨て、取ひ
 ける故果して十分に利を得たるなを諸將皆嘆服し元帥の

神機妙算鬼神も料り知るゝと能はじと申しける去れを後
 の世まで語り傳て韓信が今日の軍を背水の陣と云へり
 奇正子曰く孟子稱を盡く書を信せむ則ち書なきふ如か
 ずと兵法に於ても亦盡く常法を信せむ則ち兵法小従ひ
 ざるに如うす況して兵の變化極りなく敵をして其料る
 所を知る能はざらしめ其不思に出るを尊むものなれと
 兵家の決して常法に拘泥すべからず故に常法に拘泥す
 る者の名將と爲すに足らざるなり韓信の其常法に拘泥
 せず是れ其能く大勝を得る所以なり
 ○韓信、蘄沙の謀計を以て龍沮を討つ
 韓信の齊を攻るや甚だ急ふして田横防ぐると能はず敵々
 に打負け高密小陣を取りて追々早馬を飛し彭城へ急を告

げて救の勢を求るにより項羽急ぎ龍沮周蘭を召えて申ま
 けるハ韓信今齊を攻めて事既ふ危し齊王頻々早馬打て救
 を求汝三萬の精兵を領し速に臨蓄高密へ到りて河を破て
 齊を救へ日夜道を急ぎ早く凱歌を奏せよ必路にて遅滞す
 るゝと勿れ若し事の變あらむ早馬を馳て注進すべし朕自
 ゝ大勢を領して行て救ん龍沮申しけるハ陛下御心を安ん
 じ給へ臣誓て韓信を誅し首を帳下に獻らん項羽限りなく
 喜び自ら被たる狐裘を脱で龍沮小賜ひ又手づかす盃を執
 て二人ふ別れの酒宴をちし城下まで出で送りければ龍沮
 周蘭ハ恩を謝ちて彭城を離れ威風凛々として旌旗天を掩
 ひ劍戟日に輝き忽ち勝夫を擒にして田氏の一族を重圍の
 中より救ひ出さんずらんと上下喜び勇んで進發す韓信は

高密の城を圍んで數日を過しけるが彭城より救ひに勢來れりと聞て熊と兵を五里退けて陣を取り諸大將を集めて龍沮と楚の名將武勇尋常に越へたるを以て此のたび大將軍として齊を救ふ必ず力を以て敵すべからず我れ智を以て之を破らん諸將斯様くにせよ龍沮を討取らんこと疑ひなしと云ければ諸將計を受けて皆次第々に予出たりぬ龍沮の高密を三十里隔て、衆を下し齊王の消息を聞かしむるに韓信此間城を攻むること甚だ急にして危ふと旦夕にありと龍沮之を聞て周闔ふ申しけるは御邊韓信が人となりを知れりや我れ聞く韓信曾て一身を養ふべき資なくして食を漂母ふ乞ひ市小勝を獲てて耻辱を受け固より一寸の勇力なし決して畏るゝに足らぬ族をり周闔が曰

く然るに韓信三秦を破りてより以來至る威風の如く靡て敵する者一人もあし向き小項王も彼れが車戰に破ふられて彭城へ逃歸り給へり彼れ固より智深くて計多くして變詐測り難し將軍能く備をなして必ず併々しく敵し給ふを彼れが昔し食を乞ひ勝を潜りまは自ら今日大功を建んことを料り知りて能く小節を忍んだるなり若し其時辱を忍ばずんば空しく大死して豈小名を世に知らるゝの今日あられんや是れ智能の益々深きを知るに足れり龍沮が曰く實に御邊の言の如く韓信が向ふ所攻るに取らざることある戦ふに勝とざることなし然れども彼れ未だ勁敵に遇はず若し某が如き智勇兼備ある大將小遇の豈に其計を用ゆることを得んや我れ先づ戰書を送て明日快く戰を交へ

んどて使者を遣ハして放言を爲せる戦書を韓信小致す韓
 信其戦書を見了りて大に怒り楚の使者を斬て捨んずとひ
 しめきなるを諸大將急に押し様々に命を請ひたる故韓信
 武士に命じて三十杖打たせ額の上に朱を以て來日決戦と
 云ふ四字を書付け亂棒小打出しければ使者首を抱へ鼠の
 逃ぐるが如く這々遁れ歸り龍沮小見へ韓信種々に罵詈
 辱免て既に斬て捨んと申せしを諸人頻小止めしかば纒に
 命を扶けられしかども三十杖策れ皮肉破れ骨節折碎けて
 痛み堪へ難しと云て大に哀み地上小倒れて絶入るばかり
 に煩悶まければ龍沮面に朱にて文字を書きたるを見て以
 ての外小怒り只今急に攻免て勝夫を擒にし此恨を報せん
 とて物具取て肩小投げかけ既に馬に乗らんずらんとする

を周蘭急ぎ引止免て様々小諫めける故漸くに止り次ぎの
 日末明小兵糧を使ひ三軍の隊伍を亂さず十分に威儀を嚴
 かにし武を廻えて自ら先陣に進んで推寄られを漢の陣よ
 り之を見て韓信馬小跨り陣門開て迎出たり龍沮大に罵詈
 て申しけるは汝は固と楚の臣如何なれば義に反て漢に降
 り安に逆威を振ふて既に關中の郡縣を擾亂し尙ほ止むる
 ことを知らずして又此小來て天兵を拒んとぞ汝誠に武勇
 あらば快く出て我れと勝負を決せよ若し戦ふると能はず
 んと速に降れ然らば一命を扶けて麾下に用ゐん韓信天を
 仰で大に笑汝の既に死人なり然るを尙ほ之を知らず安に
 唇を振ひ舌を動すかと云げれば龍沮聞きも敢へず刀を舉
 げて飛んで薙れを韓信鎗を提げて迎へ合せ一往一來互に

秘術を盡くして二十餘合せ免戦ひし龍沮精神益を加へりて少しも弱まらざる體なりしかば韓信馳て詐り負けて東南の方に向て逃走る龍沮大に笑ひ我れ固より奴が臆病なるを知る今擒にせずんば何の時をの期せんとして力を盡して追殺すれば周蘭も人馬を棄て跡より進むに前に緹水と云へる河あり是れは天下に隠れなれ大河よて古より舟筏にあらねば渡るよし能はざるに今水僅かふ帯の如く流れて漢の兵向ふの岸にあり周蘭岐と心付て急に龍沮が馬の轡を執て引止め將軍必き進み給ふる緹水の如くもの大河なるよ今却て水あし固に定めて韓信が計にて河上をせき留め楚の勢の半を河を渡り過る時急ふ切流さんすと巧しならん若し然らば我等争でか一人も命を全ふすること

を得んやと云へば龍沮申しけるは韓信既に大に戦ひ負けて身を逃れんとするに暇あし豈に深き計あらんや況して河水ハ早滂に隨て多少あり當に今十一月隆冬の節にして水の涸る時なり是の故ふ此の如し安んず異しむに足らんとて馬を飛して追蒐しに士卒來て韓信前面にありて遠からずと報じければ龍沮愈々氣に乗て大軍一度に河半に打入りけるに向ふ小大サヲの如くある一の燈籠を高く懸けたる龍沮心怪と馳寄て之を見ふ一の榜を立て吊燈毬斬龍沮と云ふ六字を書付けたりしかば龍沮大に怒り諸將士に向て曰く韓信我が大軍の追蒐ること甚だ急ある故假に此計を設けて我軍心を惑して猶豫ひ怪む其間に遠く逃去らんとする者なり周蘭聞て否やと左ふあらざるべま必ず

俄々しく進み給ふな今既に夜深て今宵の殊更に暗黒
 なれば争でか俄に此計を設くることを得んや個の韓信豫
 め此邊ふ兵を伏置き我等が此に来るを待て燈籠を印に四
 方より打て出で攻圍んずらんとぞ巧みしならん早く燈籠
 を切落し給て敵必ず自然に亂るべしと云ければ龍沮急
 に刀を抜て燈籠を切落しけるふ忽ち喊の聲大に起り限り
 なき漢の軍勢兩方より率り出でたりしかば諸軍大に驚く
 所に又河上より俄に大水漲り來り逆浪滔々として天を浸
 し其疾きふと箭の如くありしかば楚の勢河半にありて前
 後ふ度を失ひ我れ先きにと岸へ上らんと互に推合ひ踏合
 ひける間に早や大波濁り來りて了に一人も残りなく溺死
 したるこそ憐れなれ龍沮河口ふありたるが浪の音に驚き

急に馬に鞭を加へけるに此馬の元來千里の名馬なれば只
 一躍も北の岸に上り暫く後陣の體を伺ふ所ふ忽然として
 一聲の鐵砲を響して漢の大將曹參夏侯嬰等大軍を率ひ來
 り四方より取圍で緊し死こと鐵壁の如し龍沮の暗黒の夜
 の事なれば何れを夫れとも辨へ難く刀を舉げて當るを幸ひ
 に斬て回りければも方孤にして遂に出ること叶はず曹參
 が爲めに只一刀に斬落されけり個の韓信初めより龍沮が
 人となり驍勇ふまて性の烈きふと火の如くなるを能く知
 りける故先づ柴武に命じて一萬餘の礮に沙を盛て雜水を
 せ死留めさせ河下に燈籠を懸けてふれを切落す時と河上
 の礮沙悉く崩れてせき留免たる水の一度も急に流がる、
 横小探り又龍沮が怒を激して燈籠を切落させん爲めも榜

を立て六字を書付け置きけり案ふ違はず龍沮大に怒て了ふ燈籠を切落したる故蘆沙忽ち崩れて大水俄に來り果して一人も殘らず死したるなり

奇正子曰く蘆沙の計は兵家の屢々用ぬる所ふして韓信も亦三秦を攻むる時既に此計を施用したることあり然れども龍沮を討ち去蘆沙の計は能く龍沮が姓の烈兒を察して燈籠を掲げて之を欺き怒て切落すを合圖にせき留めたる蘆沙を崩して水を降したる等の計の其事極めて妙あり故に取て以て茲に之を掲ぐと云爾

○第四節 陳平

○陳平、反問の謀計を以て范増を排く

大漢の三年丁酉冬十一月韓信既に魏代燕趙の四國を平ら

げて威風遠近を動き由其聞へありければ范増、鍾離昧等項羽に見へて近比韓信魏豹を擒ふし夏悦を斬り趙を破り燕を下だして到る所勝たざることなく漢王坐ながら榮陽を守て四方の諸侯も楚を反て漢に歸する者多し若し此儘にて指置れば根を深ふし葉を固ふして後ち容易くは除け難からん陛下速に兵を起して征討し給ふべし項羽の曰く朕既に此事を聞て不日に兵を擧げんと欲する所に汝等が奏する所善くも朕が意ふ合へりとして即時に命を傳へ十萬の勢を整へて榮陽へ寄せんと用意をなす漢の細作早く此由を聞知て馳て注進しければ漢王急ぎ張良、陳平を召して議を給ひける今韓信遠く北方を征して未だ歸らざるに項羽虚に乘て又此處へ攻來らんとを御方英布は既ふ九江へ

歸り王陵ハ母の別れを嘆き病に染みて未だ愈む其外の諸
 大將も多く韓信に従て北國にあれば城中空虚にまて防ぐ
 むと能はず我れ之を如何すべき予陳平が曰く御心を苦め
 給ふな臣一の計あり項羽の常小恃む所の骨骸の臣ハ范增
 鐘離昧、龍沮、周殷等僅かに五六人に過ぎず今度此處へ攻來
 るも固と項羽の意にあらじ乃ち彼等が勸めふ因てあり今
 若し反間の計を行ひ楚の將士小賄を與へ范增、鐘離昧等が
 異心を企る由を流言せば項羽素より慮淺くして讒を信ず
 る者あれば必ず實なりと思ひ假令范增等如何なる妙計あ
 りとも疑ふて之を用ひまじ其時臣又一の計を施すを項羽
 怒つて了ふ之を誅殺すべし楚若し范增なくんバ項羽争て
 其勇を用ふることを得ん其弊も乘て大王急ふ討給ハ、楚

忽ち亡ぶべし漢王限りなく喜び即時に黄金四萬斤を出し
 て授給へば陳平之を請取り密に心腹の人を遣はして楚の
 將士に分ち與へ伴て范增、鐘離昧等數度の功勞あれども項
 羽了に封爵の沙汰なければ皆恨を含んで漢と内通し力を
 合せて楚を亡し其土地を分ち取らんすんと企る由を云
 はせければ案に違はず項羽此の流言を聞て色を失ひ朕誤
 て奴原小欺き賺されんとせりとて是れより後ハ敢て共
 ん事を請せざりなり斯くて大軍を領し滎陽へ到て寨を下
 し次ぎの日自ら進んで押寄せ四方より取圍んで三日が間
 息をも繼せず攻めけるに城中ハ只堅く守て出合はず項
 羽急に令を傳へ是れハ空城なる予速に打破れとて射手を
 揃へて鐵砲、火箭を一齊に放ち合せければ城中より之を見

て大石大木を雨の降る如く抛げたりしかば楚の兵大に騷
 亂きて一人も近付くこと能はず時に張良漢王に奏しなる
 の項羽城を攻むること甚だ急あり今若し使者を遣はし詐
 て降参し給ひし項羽必ず和睦せん其時却て陳平が計を用
 ひて君臣の間相疑はしめば大事必ず成就せん漢王の曰く
 項羽若し許容さずんば如何せん張良が曰く項羽の天性躁
 うして氣剛ければ心中甚だ悶へ苦ん若し漢の使者一とび
 至らば忽ち兵を退て和睦せんよと疑ひなし漢王乃ち隨何
 を使者として楚の陣に至らしめんとす隨何の命を受けて
 先づ櫓に上りて大音を擧げ我れ漢王の命を受る一大事の
 使者として楚の陣に至らん人々必ず聊爾し給ふよと云て
 城の東門より出て直ち楚の陣に到り項王に見へて申し

なるの漢王始め陛下と共ふ懷王の命を受けて兄弟の約を
 なま二手ふ分れて秦を伐ちたり其後秦中險難の地に封せ
 られしかば遠く父母の國を離れ忍びず一旦兵を起して攻
 め上ると云ども其志固と天下を圖らんとするにあらず今
 既に關中の地を得たれを平生の望み足れり願くは師を收
 めて滎陽より東を楚の界とし西を漢の界とし速に韓信を
 召回して各封疆を守り百姓干戈の禍を免れし免て共に永
 く富貴を保んと欲す陛下望むらくは之を察せよ項羽之を
 聞て良久しく兎角の答もなかりけるが了ふ范増を召して
 譏しけるの漢王今隨何を使者として和睦を求む能々思案
 するに朕彭城に都すと云ども地方甚だ狭し殊更近き比の
 四方の諸侯離れ反て漢其七八を得たり如かず彼れが望む

に任せ暫く師を班して他日再び計を運んぬ如何に范增
 申まぬるは其議決えて無用にて候榮陽今空虚なるふ陛下
 の攻給ふると甚だ急なるゆへ是非なく和睦を乞ふと云
 も固より本心にあらず益々力を盡くまて攻給へ臣等も亦
 心を盡くして計を設け不日ふ榮陽を踏破らん韓信假令百
 萬の雄兵ありとも必ず大事を成すると能ひじ豈に輕々し
 く隨何が一言を聞て此機會を失ふべけんや項羽猶豫して
 必決せず隨何に向て汝暫く退れ朕再とび能く商議えて事
 を決せんと云べ隨何申しけるに陛下自ら御心を決し給へ
 必ず他人の言に惑され給ふも且つ韓信既に北國を平定ま
 て近き内より歸り來らんとす陛下久しく此にありて糧乏し
 く士卒疲れたるも若し韓信が大軍後より來り城中よりも

打て出で來んで攻る程ならば陛下如何んぞかし給はん其
 時假令知を求め給ふとも漢王反て從はじ加之天下の人様
 々に笑ひ辱ん臣今漢にありと云ども固と楚の臣なれ今日
 の言誠ふ心腹を吐出す陛下前に斧鉞あり臣豈ふ欺き誑す
 ことを得んや只早く聖裁して他日の後悔を免れ給へ項羽
 大に喜び汝が言悉く理ふ合へり朕が意既に決せり汝先づ
 歸り去るべし朕跡より使者を遣はして和睦を成さんと云
 しかを隨何別れて城中に歸り此趣き委しく奏し速に陳平
 を命じて計を行へまえ給へと云へば漢王乃ち陳平を召さ
 れ項羽果てて隨何に欺れ使者を來たして和睦せんとを汝
 如何なる言をか施すべきと問ひ給ふに陳平近く寄て斯く
 にせんと耳語れを漢王掌を打て此計若し成就せば

と范增休矣云て喜び給ふ項羽ハ范增が諫を用ひず了に虞
 子期を召て朕今汝を榮陽へ使ひさらしむ汝漢王に見へバ
 三日の内に必ず城を出で朕に見へ再び前日の好を修すべ
 しと云て能々城中の虚實を伺ひ來れと云へバ虞子期命を
 受けて直ちに榮陽へ到りけるに門を守る人漢王昨夜大ふ
 酒を過して未だ起きずと申せしかば暫く客屋に入れて休
 ん居たるに忽ち張良、陳平二人出迎へ伴て一の高閣ふ上り
 金杯玉碗を陳ね美酒嘉肴山海の珍味數を盡くして饗應し
 乃ち問ふて申まけるハ范亞夫恙なれや今日は又何事あり
 てる足下を勞して此に來しむる虞子期怪んで我れは范
 増が使にあらず即ち項王の使なりと答ふれを張良、陳平興
 醒発顔ふて我等此人ハ亞父の使なりと思ひしに偕ては項

王の使なるかと云て左右に向て汝等楚の使者を客屋へ伴
 ひ行て懇小饗應せと云捨て共小帷幕の内にど入まけれバ
 左右の人乃ち虞子期を引て圍より下しむ虞子期ハ彌々
 心怪んで客屋の内に入りぬるふ萬づ始々に引替り器皿の
 類を欠損して至からず下都一兩人粗食村醪を以て饗應し
 張良、陳平も再び出でざりしかば心中甚だ安かざる所に
 從者外より來て漢王今眠り覺えたりと告げしかば乃ち衣
 を整へ客屋より出で内に入まけれバ隨何出迎へて一の密
 室に請じ入しむ虞子期密に室中の櫛子を伺ひ見れば數
 千卷の書籍文案に堆く兩邊小帷帳器皿の類齊しく備へた
 り時に隨何申しけるハ漢王今漸く眠醒めて未だ梳洗せず
 足下暫く此に待給へと云て外ふ立出より虞子期乃ち立て

其邊を伺ひ見るに文案の上ふ諸方より往來の書簡を多く積置しかば密に一々に抜き見れば其中に誰とも姓名を書ざる書簡一あり怪しく思ふて之を讀むに其畧に曰く

項王彭城失守提兵遠來人心不歸天命離叛大兵不過三十萬勢漸孤弱大王切不可出降當急喚韓信回棗陽老臣與鐘離昧等為內應指日破楚必矣黃金不敢拜領破楚之後願裂土封於古國子孫綿延百世臣之願也

虞子期見了りて大に驚き是れ紛れべうもなき范增が書簡なり近比彼れ漢と内通して共に楚を亡んと企る由汰沙ありしかども定めて虚説ならんと思ひしに今日張良陳平が舉動只事ならず今又此の書簡を見るに偕て人の申をも實なりけるよなと思ひ密に其書簡を袖の内へ藏しけるを

張良陳平は壁の際より伺ひ見て計既に成就せりとして喜びあへり暫くありて隨何又出來り虞子期を引て漢王に見へしむ漢王宣へけるは我れ昔し項王と共に秦を伐つとき懐王約を定めて早く關ふ入る者を關中に王とせんと宣へり我れ項王より先きに關ふ入て早く秦を亡したれを宜しく關中に王たるべし然るに項王約に背て我れを險難の蜀に封せられしかば我れ日夜父母の國を思ふて了に兵を起せり今既に關中の地を取て平生の望み足りぬれを久しく苦戦して民の命を傷ふことを欲せず使者を以て和睦を求めしに幸にして許さる今より關の西を漢とし東を楚として各々師を收めて永く疆土を守らんと欲す足下我が爲めに此由を再び項王に奏せよ虞子期が曰く項王既に此事を願

掌し一たび大王に見へて明かふ舊日の好みを述んと欲し
 今日某を使たしむ大王三日の内に必ず城を出で項王に
 見へ給へ漢王の宣く我れ能く諸人と相讎し必ず城を出で
 見ゆべし足下先づ歸て此由を傳へられよ虞子期乃ち別
 れて楚の陣ふ歸り城中の爲體張良、陳平が舉動始終一々に
 奏して彼の書簡を出して見せければ項羽見了りて勃然と
 して大に怒り老匹夫何ぞて此の如くある是尋常の事にあ
 らず速に拷問して其罪を正さんと云けるを范增傳へ聞て
 甚だ哭き急に走り出で地に拜伏し臣久しく陛下小事へて
 國の爲めに肝膽を碎く豈に敢て異心あらんや個は是れ張
 良、陳平が陛下疑はせ陰に誅殺せしめんと巧みし反間の
 計なり願くは能く察し給へと云ば項羽愈々怒て曰く汝無

益なるに言を費やして詐ること勿れ虞子期は朕が心服の
 人既に其實跡を委しく見來れり安んぞ虚説あらん范増長
 嘆し心の中ふ項王固より疑ひ多くして内決断なければ終
 に大事を成すこと能はじと想ひ大言して申しけるは天下
 の事大よ定まれり君王自ら心の儘に行へ給へ臣陛下小事
 へてより數年心力を盡くして屢々功勞を建てたり願くは
 故郷へ放し還へして老を養はしめ給へ乃ち陛下天地の
 大恩なりとて涙を流しければ項羽も范増が年來忠誠を勵
 して勤勞せしむとを思ひ覺へ老涙を催ふして流石ふ誅を
 加ふるに忍びず望み小任て了に人を付けて故郷へを還へ
 らしむるころ楚の滅亡の基とい知られたり噫
 奇正子曰く反間の計ハ餘り上品なる計とも覺へずヤト

拙劣き計なれども兵法は固より詐りを厭はず已むを得ずして之を用ふ亦敢て不可なるなし故に古來反間の計を用ふる者少なしとせざれども陳平が范増を排けたる反間の計と三國の世吳の周瑜が魏の蔡瑁張允を斥けたる反間の計の如きハ實に巧みなるものにして之れが爲め其計に陥れられざる者殆んど稀れなり故に取て以て茲ふ之を掲ぐと云爾

○陳平、木像の謀計を以て冒頓の圍を解く

我朝の飛彈甚五郎が彫刻一木像ハ精神あるが如く生けるに似たりとかや支那に於ても亦漢の陳平が計に用ひ一木像ハ能く生る人の代理を爲して敵の圍を解き小けり漢の高祖既に項羽を討ち楚を平らけて大事茲ふ定まるの後

ち匈奴の冒頓兵を起きて韓國へ攻來りしに韓王姬信之れ小敵するよと能はず了ふ本部の軍馬を領し却て之れと心を合せて同く謀反し太原、白土等の地を攻從へし由注進ありしかば高祖自ら曹參、樊噲、斬欽、盧縮等二十餘人の大將と精兵三十萬を領して即時小咸陽を平打立ちけり此時韓王姬信は晉陽に屯し匈奴の冒頓ハ代谷に陣を取りたるが高祖自ら大軍を統て打出で細作を出して虚實を伺ふ由を聞て態と究竟の精兵を山の後小圍し置れ只年老ひて疲勞れ弱りたる士卒瘦衰へたる牛馬を陣の表に出して相待ちふなり高祖ハ此時趙の城小陣を取りけるふ十人の細作歸り來て右の趣を報じければ高祖聞て左ふるあらんずらん蠻夷の賊徒争でか朕ハ中國の兵ふ及ぶべきとて即時に兵を

進めんとす宣ふを陳平等諫めて申しけるハ匈奴等素より詐り多し況して韓王姫信晋陽よりありて之を扶くれバ恐くは深き計の候ふべき陛下再び能く虚實を聞定めて其後に兵を進給へ高祖宣く冒頓姫信が強き之を項羽六國ふ比較ふれば如何之れに劣ること遙ふ其下にあり然るふ其項羽六國の強兒も尙ほ且つ朕に敵する能はず況して之れに劣る冒頓が輩をや豈に論ずるに足らんや汝等が慮り甚だ過ぎたり陳平押かへして否や〜敵を侮る者は必ず敗る冒頓甚だ勁勇なり陛下決まて侮り給ふると再三諫めしゆへ高祖又劉敬に詔して敵の虚實を探り聞かまむるに數日ありて馳歸り果して陳平が申せし如く敵深く計ありげふ見へ候夫れ敵必ず威を輝らし武を盛にして其強を見をべに

小臣冒頓が陣を見れば普被れ弱とたる軍馬あり是れ必ず強を貯へ外に弱を見して陛下の心を懈らしめ却て奇兵強卒を出して討んずと料りまならん若し輕々しく進給ハ必ず計に陥給ふべし宜しく先づ然るべし大將をば遣ハし明に虚實を察して其後に打向給へ高祖叱咤つけて宜く汝素と辨舌を以て高官を授り曾て一度の勳功もなし今又無益あるに妄小強弱を論じて我が軍情を阻て諸人の心を惑す汝必ず敵の賄を受けて内通の心ある者あふんとて了に武士に命ぞ劉敬を縛せて趙城に留め置れ即時に三軍を整點して平城まで發向し先づ樊陰に命じて敵の様子を伺はせらる、小暫くありて歸り來り敵果して何の備もなく城の北なる小松山に陣を取て候が墓々しく旗幟をも立てず

隊伍甚だ亂れて其勢僅かに四五萬に過ぎじと相見へ侯と
 奏を高祖笑て宣ひなるハ劉敬匈奴と内應し朕が大軍を
 て急攻蒐ふんとを恐れ妄に敵深き計ありと云て朕
 に兵を進むららしめ密に敵を夜中よ落さんとせまものな
 り朕胃頓が陣を破らん事具に朽たる木を碎くが如し何の
 畏れか之れあらんとて急大軍を率て先づ城入り自ら
 中軍坐して諸軍の手配をなし給ふ既に黄昏の比ふ及ん
 で城外に夥しく鐵砲を響して匈奴の軍勢四方より散を知
 らず攻來ししかば高祖急ぎ人を楯に上ぼせて見せしめ給
 ふふ彼人周章しく楯より飛下り匈奴の大軍此城を圍んで
 昔日項羽が勢の強き類ふあらず遠く數十里の外を望むふ
 火把の光り相運て其數何百萬と云ふを知り難しと告げ、

れを高祖大に驚給ひ悔らくハ劉敬が言を用ひず果して奸
 計の中れとて急に陳平を召して計を求む陳平申したる
 ハ番兵素より戦を好んで甚だ勇壯なり御方必ず力を以て
 は此圍を破ること能はじ只奇計を以て敵の心を惑さば或
 ハ此難を免るゝこともやあらんか高祖宣く如何なる計を
 用ふべき陳兵、高祖の前に近づた臣一の計あり匈奴常々皇
 后を稱して闕氏といふ冒頓素より荒淫にして深く闕氏を
 寵愛し凡そ國の政を悉く彼れに任せて暫くも相離れず今
 臣が手下に李周と云ふ者あり此者極えて書を能くそ臣此
 れふ一の美人の圖を寫させ五色を以て之を彩飾させ密に
 人を仕立て匈奴の陣遣し番の者共に多く賄を與て深く
 陣中に入り金銀珠玉を備て此圖と共に闕氏に與へ冒頓城

を攻給ふると甚だ急ふして漢の兵之に敵をること能はず
 故に今此の美人を送て和睦を求めんと欲す夫人願くは此由
 を奏して兵を退け給へと云を關氏美人の圖を見て心の中
 に高祖若ま此の美人を送らば冒頓深く之を愛して必ず我
 れに薄からんと想ひ定めて冒頓ふ勸めて兵を退かしめん
 其時陛下大軍を統て急ふ圖を出給へ高祖大に喜んで此計
 極めて妙なりと宣ひしかば陳平乃ち夜を日ふ繼で李周ふ
 美人の圖を畫せ心腹の人に命じて匈奴の陣へ遣はしける
 小其人多くの金銀を出し番の兵共ふ與へて了ふ關氏に見
 ることを得たり乃ち彼の美人の圖を金珠の贈物と共に獻
 りければ關氏之を得て漢の使者ふ見へて申しけるは金珠
 の贈物は我れ謹んで之を受くべし此の美人の圖の妾何よ

のせん使者答て曰く漢の天子冒頓大王に手あげく攻めら
 れて孤城危きこと旦夕にあり是の故に美人を送て和睦を
 求めんと欲し先づ圖を寫して呈上す夫人願くは大王に此由
 を奏して兵を退かしめよ關氏圖を見了て暗ふ思ひけるは
 漢帝若し箇様の美女を送くと冒頓必ず深く之を愛して
 我れを何れの處に棄置んも亦洩り難し如かず禍の至らざ
 る先に此の圖を解て漢の天子を放し早く都へ歸へらしめ
 ば美女を送り來ることもなくして後の患もあるまじとて
 使者に向て申しけるは汝歸て漢の天子ふ能く奏せよ必ず
 美人を進め來ること勿れ我れ明日冒頓に勸めて兵を退る
 しめん若し又我が言に従はずんを忽ち城を攻破らん使者
 まずまじたりと喜び夫人若し大王ふ勸免て兵を退け給は

い漢帝年々夫人に貢物を捧て永く好みを結び又美人を送
 るともあるべからずと云て出たりぬ關氏其夜冒頓小見へ
 て申しなるを漢の天子今攻圍まるまふと七日七夜若干軍
 馬内にありて尋ば弱りたる氣色なりと是れ皆天の祐くる
 所ありて上下の神祇も加護し給ふらん況えて又天下の諸
 侯皆手を拱て歸服をること久し必ず甚ぶ急に攻圍を待ふ
 な若し國々の諸侯大軍を起して來り救ひ、御方之れに勝
 つこと能はざるのみふあらず大王と我れと快く樂むふと
 を得し冒頓之を聞て實もと思ひければ汝能くも申したり
 我れ明日圍を解て漢の天子を放し歸さんとぞ申しける次
 きの日韓王姬信冒頓が高祖を放んとぞる意ある由を傳へ
 聞き急に來り見へて申しけるは大王如何なれを高祖を放

し回んとい宣ふ予既に孤城の中ふ攻圍んで亡さんこと當
 の中ふあり今若し之を放さば虎を放て山に歸らしむるな
 り必ず後に大なる患をなさん某又承る高祖此間關氏の方
 へ使者を來ま美人の圖を送て和睦を求むと斯は皆詐の計
 にして大王を欺て兵を退らしめんとするものなり大王今
 日城を攻給ふ時先づ美人の有無を正し果して城中に美人
 ありば乃ち圍を解て放し給へ若し美人なくんば彌々急に
 攻めて之を滅し給へ城中必ず美人なし冒頓之れに従ひ人
 を城下に出して漢帝先きに美人を送て和睦を求んと云ふ
 若し果して城中に美人あらむ明かま之を出せ我れ必ず圍
 を解て都へ放し回へぎん若し詭りありば今日の前ふ城を陷
 破んと呼とらせければ高祖之を聞て急に陳平を召して

宣ひけるに冒頓自美人を見て其後以圍を解んと云今此城中に美人無如何してか敵を欺ん陳平笑曰臣既に冒頓が必ず美人を見んと云んするを料り知て此間多くの木像を作り五色を以て彩飾し華やかに衣服を被せ置たり今日晩に及んで橋の上小灯を挑げ其蔭ふ此木像を雙へ置て之を見せば其距離遠く去て木像なるを知らるふ由なく彼れ必ず實の美人なりと思ふて忽ち兵を退けん高祖眼りなく喜び人を橋に上げせて今晚多くの美人を橋の上小出して見せ申せん大玉親ら撰び給へと呼べらし先は冒頓之を聞て甚だ喜び晩に及んで親ふ城下に到て望み見るに橋の上小灯を黙て其蔭ふ二十餘人の美女齊しく粧ふて雙居るに華の姿月の鏡恰も眞の天仙かと怪まる、怪なる

れば冒頓限りなく喜び急に命を傳へて悉く兵を退け、れを高祖のすそやとて大小の將士を率ひ樊噲、曹參、周勃、王陵四人を殿とし三萬の勢を授けて追躡る敵を防がせ取るものをも取り取へず即時小城を出て趙を望んで走りけり冒頓の漢の兵の悉く出たりたるを見て美人を取らんとて急小城中へ込入て見るに豈ふ圖らんや橋の上なるは皆木像に去て眞の美女一人もあかりしかを勃然として大に怒り急ぎ大將王横を召して汝兵を領し早く高祖に還付て悉く討止めよと命をれば王横命を受け飛ぶが如くに追躡る漸く三十里ばかり馳て漢の勢は追付き奴原何地までの逃さん不勇し回せと呼ハツて驚地暗に討て薙れば樊噲、曹參周勃、王陵之を見て隨留て鋒先を交へ四方より取巻て餘さ

じと攻免たりしるば王城なじかの敵すべき戦はんとする
 心なく真中に取込まれ如何いせんと目ばかり働く所を後
 よと樊噲戟を揚げて斬て苋り大喝一聲其響き大山の崩る
 、が如く怒れる鬼鬚倒に堅て其有機恰ら夜叉羅刹の如く
 なれば王城大に震ひ慄き覺へず馬より真倒に落ちけるを
 樊噲飛苋り忽ち首を取て指擧げ、れを匈奴の軍勢大將の
 討れたるを見て我れ先きにと皆四角八方へ逃失せしかば
 樊噲王陵等敢て之を追はず兵を收めて太原の大路を望ん
 で高祖に追付き共入趙の城に予入りふける高祖急ぎ左右
 に命じて劉敬を獄中より引出させ親ら其綱を解釋し安撫
 して宣ひけるは朕不明ふして汝が言を聽す誤て白登山に
 入て攻圍る、こと七日七夜事既に十分危急にして殆んど

命を失んとせしが幸に陳平が計に因て虎口を逃る、こと
 を得たり是れ専ら朕が不明のみにもあらず十人の細作敵
 の虚實を伺ふこと精うらざりし故なりとて以左右小命じ
 て先き入細作に出したる十人の士卒を捕へ御前ふて悉く
 首を刎せせ重く劉敬に恩賞を與へて建信侯ふと封じけり
 奇正子曰く陳平が木像を以て美女と詐り見せたるは夜
 の事ふして特に其距離ることも亦程遠ければ冒頓が之
 を真の美女と誤認めたるは左もありつらんとは云きも
 其距離致て甚だ遠きよあらざるべければ活眼を以て之
 を熟視れば豈ふ亦之れに欺かるゝの愚あらんや然れど
 も古語に曰く身好樂ふ所あれば則ち其正しきを得ずと
 冒頓荒淫にして美女を好樂ふと甚だし如何んぞ其正し

きを得て其木像あることを知るを得んや餘り婦女を好
 樂ふよとの切なる者は痘穴を認て醜となし脇臭を嗅で
 辟香となすは其常あり冒頓が美女を好樂ふことの甚た
 しき透ふ木像を見て美女と認めしは固より然るべき所
 にして敢て異むに足るものあり陳平も亦始めより之を
 料て木像の計を用ひて冒頓を欺得たるなりん實に奇
 々妙々の計と云ふべし嗚呼可笑しやな

○第五章 李確

奇正子曰く李確の董卓の臣下ふして董卓滅亡て後ち天
 下安堵の思を爲す間もあらず李確郭汜共に惡心を懷て
 天下を横領せる逆賊よまて固と心根の善からぬ者なれ
 ども本書編著の旨趣に善人君子の善言美行を記する

修身書にあらで武人の智計を取るにあれば其心の善
 惡の本書の問ふ所ふあらす唯奇計人を感せしむる者を
 取るふあり是れ李確が計を本書に編入する所以あり聊
 か之を辨するふと爾り

○李確、金進、鼓退の變法を以て呂布を破る

李確、郭汜の長安ふ討入らんとするや王允、呂布をして之を
 防がしむ呂布が先陣李肅未だ呂布の命なれば戰を始先て
 大小敗れたれを呂布大に怒り李肅が首を刎ね殿しく軍法
 を正して敵陣に攻近きけり李確此由を聞て大小驚き自ら
 兵を引て打出でけれを呂布戰を舞して大勢の中へ討て入
 り左に突き右に撞き勇を震て戦ひしかば西涼の勢皆馬の
 足を立て兼ね夥しく討れて五十里退て山の傍に陣を取り

郭汜、張濟、樊稠等悉く一處に集て如何せんと議しければ李
 確申まねるゝ呂布が勇猛當り難しと云ども元來智謀なき
 者あれば敢て畏るゝふ足らず我れ一軍を引て谷の口を固
 免毎日彼れを欺て矢軍ふて日を送るべし其間ふ郭汜の密
 に呂布が後へ回り日夜兵を出して昔し彭越の楚を攻めた
 りし法に效へ金を鳴しての兵を進め鼓を鳴しての兵を退
 け敵の心を驚き疑はしめば呂布前後に度を失はん張濟と
 樊稠との二手に分れて長安を襲ひ給へ呂布之を聞かむ必
 走大に亂るべし我れ其時西方より追討ふ進まば長安を破
 らん事掌の内ふあり諸人皆討を受け手配を定めて打立ち
 ければ李確兵を進免て戦を催す呂布驍勇乗て驍暗地に打
 て蒐り喚き叫んで戦ひければ李確が勢奮り立てられ退て

山に上る呂布之を追ふて登らんとするふ上より大木大石
 を投る事雨の降るよりも繁ければ急に退んとする時思ひ
 も寄ぬ後より賊を咄と擧げて郭汜が勢打て蒐る呂布驚て
 之を拒んとすれば鼓の聲大に響て郭汜が勢の引退き李確
 金を鳴す一鑼を敲て潮の沸くが如くふ打て蒐る呂布又取
 て回して戦んとすれば鼓の聲大に響て李確遂に引退れ郭
 汜金を鳴すして後より攻む此の如く晝夜旦暮に時を定め
 ず推寄せ左を拒がんとすれば右を討ち右を救んとすれば
 左より蒐り十日あまり悩しければ呂布心疑て氣力疲れた
 る所に長安より早馬打て張濟、樊稠二手に分れて都を攻る
 に官軍小勢ふて防ぐると能はずと告げ、れば呂布色を失
 ひ軍を收免て都に回へらんとす李確、郭汜之を聞付け勝ふ

乗て追蒐れ、れは呂布が勢討たる、者數を知らず大半は降参しとりけり

奇正子曰く鼓を鳴らして進み金を鳴らして退くハ兵家の常法なり然るも李確其變法を用ひて呂布を破る呂布ハ勇ありて智ありし之れを爲め驚き疑ふて大敗むたるは固より其所にして李確賊軍とは云さも能く料りしものと云ふべし

◎第六章 曹操

○曹操呂布が心を推して大に之を破る

曹操が僕陽を攻めんとするや呂布之を聞て兵の用意調はざりしを高順張遼等を諸處に分て兵糧を運送せしむ此時曹操が大軍既に押寄せ城を四十里隔て、陣屋を掃へ青

麥を茹て兵糧の資とせる由聞へければ呂布急ふ押寄せけるが曹操が陣の傍に深く茂りたる林ありければ若しも伏勢やあつんかと疑ひ進まずして空しく引回しなり曹操之を見て諸大將に向て申しなるハ呂布戦はずして引退さしハ必定林の中伏勢あらんことを疑ふてあり我れ量るも林の内に少々旌旗ばかりを結付ハ西の方堤の下に幸ひ氷さければ精兵を其蔭に伏置ん然らば明日呂布來て必ず林に火を掛くべし其時思ひ寄らず悉く打て出で敵の後を圍なば呂布必ず擒となるべしとて陣屋の内ハ鼓を打つ者五十人を留め置近邊の百姓を驅加へ鼓を打ち喚き叫んで大勢籠りたる體を見さしむ呂布は空しく引退て陳宮と計を議するも陳宮申しけるハ曹操は詭の計極えて多し輕



後六十七



曹操林
中伏有
見きて堤下
に伏と置く

後六十六

々しくし給へ、大なる破れを引出ぎん呂布が曰く我れ何
 ん予曹操を怕れんや明日林に火を付けて彼れが伏勢を焼
 破らんとて次の日陳宮、高順を留めて城を守らせ自れ大軍
 を引て打て出で林の内を望み見るに旗幟少々立て風に
 へりて見へけれを兵を馳て大に進み四方より火を掛けて
 盡く焼拂ひしかども敵一人も見へず陣屋の内に鼓の聲大
 に響て喚き叫ぶ聲絶へざりしかバ心疑ふて進み得ざる所
 に陣屋の後、一手の勢出でるを見て急ぎ退散て討んと
 すれば合圖の鐵砲を鳴らして堤の蔭より伏勢一度ふ起り
 夏侯惇、夏侯淵、許褚、李典、樂進、典章六騎の大將馬を飛して打
 蒐る呂布大に驚き悼れて走りければ大將成廉既に樂進ふ
 射殺され其餘討る、者數を知らず陳宮之を聞て斯くてハ

孤城守り難し早く出で走るべしとて高順と妻子老小を扶
 けて我れ先きにと落行きければ曹操勝ふ乘て城中ふ攻入
 り其勢ひ破竹の如し太守張邈ハ這々遁れて袁術が方へ落
 行き弟の張超は自害して焼死ふけり是より山東の一境悉
 く曹操に従ひ靡きければ民を安じ城を固め尙ほ諸國の勢
 を集めけり

奇正子曰く佛以里伯斯と稱す假造の事實は必ず皮相の
 合宜を備ふるものなると抑も兵家の伏勢を設くる所以
 のものは敵をして伏勢あることを悟ら去れず不意に討
 出で、之を蒐散するものなり故又伏勢を成るべく敵に
 知れざらんことを務め旗幟なすハ固より以て少しも敵
 の目ふ觸れしむべきものふあらず然るを曹操林の中に

旗幟を立て伏勢あることを見よは皮相の合宜にして大活眼者より之を見れば拙劣ある計なるに似たれども曹操も亦始めより其拙劣なることを自ら知るも呂布か人となり再ありて智なく斯く皮相の合宜を見ずに於ては彼れ必ず我が詭計に陥るべしと見極めたるに即ち兵法の所謂彼れを知り己れ知るものなり

○曹操兵卒の怨を避く

曹操兵を會して袁術を伐んとするや手勢三十萬に餘りれば日毎に費す所の兵糧幾千萬と云ふを知らず且つ諸郡數年の水旱に百姓皆飢疲れて木の根を掘り草の葉を採て僅に命を繼ぐばかりなれば掠め取るべき物もなし斯て此陣叶ふまじ諸軍勢力を激して城を一時に攻落せとて速

に戦はんとすれを城中嚴く守て出合す兎角する程に一月あまりも過ぎぬれば曹操が陣中既に兵糧盡きて人馬漸く飢乏小臨む是れによりて呉の國へ使者を馳て孫策小米十萬石を借して分ち施すと云ども又日ならず去て竭ぬ呂布玄徳も本國より運漕すと云ども路遠く去て思ふやう小間に合はず兵糧の總官任峻と倉奉行王垢と來て曹操小巾しけるに御方の勢雲霞の如くにして如何ふすれども糧繼ぎず悉相宜しく料ひ給へ曹操申しけるに我れも亦爲すべき質なし汝先づ小解を以て糧を與へて暫く一時の急を救へ王垢申しけるに然らば兵共の怨むることや候とん曹操が曰く我れ一の質あり先づ小解を用ひて糧を分れよ王垢命を領し毎日糧を送り與ふる者共に小解を以て施しければ

曹操密に陣中の様子を窺ひ聞かじむるふ諸軍皆怨を含み
 此處彼處に寄合て曹丞相如何あれハ斯く我々を欺き給ふ
 予兵糧の數足らずと小言く曹操急ぎ王垢を召して申しけ
 るは諸軍今我れを怨んで如何ともすべきやうあし汝一
 物を借りて之を静んご欲す必ず妻子を心介ふること勿れ
 我れ能く養ふべきぞ王垢問ふて曰く何を某に借給ふべき
 ぞ曹操曰く汝が頭を借らんと欲す王垢驚て申しけるは
 某如何ある罪か候や曹操曰く我れ能く汝が罪あきを知
 る然れども汝若し死あざれを三十萬人の心悉く變せん王
 垢哀んで再び言んとするを無慙ある哉早や曹操武士小命
 じて一刀小頭を斬りせ畢の先に指擧げ榜を立て諸軍に示
 し王垢私小糧を盗みて小解を用ひたり是に由て墮んで軍

法を正し頭を刎ぬるなりと觸れさせければ三十萬の勢之
 を見て借て丞相の所爲にあらざして王垢が私より發
 りける事よなと云て怨る者をあかどけり
 奇正子曰く本件の無慙なる事にて曹操の心鬼とも蛇と
 も云ふべれの言葉なしと云ども其計の奇ある本書に載
 すべきものあり

○曹操水屬を用ひず一言を以て兵士の調を止む

建安三年初夏曹操、張繡を討んとて兵を調て打立たるふ五
 月の末に到り南陽を指して進むふ諸軍皆長途よ疲れ山路
 を經て打通るに暑氣殆んど堪へ難く咽喉渴ひて水を求む
 れども更に一滴の水だもなく上下息を休めて暫く進まざ
 りしかば曹操密に計を案じ出し馬上より鞭を以て指えを

しへ此れより先きに梅の林あり早く行て梅の實を取れと云けれバ諸軍皆口に津を生じて少しも渴せず忽ち難處を越へたるも天の助けにや幸ひにして氷ある所より到りけり世の諺に梅酸の渴を止むと云ふハ即ち是れありけり大脳氏曰く曹操は姦雄にして敢て稱すべき人ふはあゝねども奇才のあるて亦稱すべきものあり今本件の如きは實に奇々妙々の計と云ふべし

◎第七章 賈詡

○賈詡、曹操が反を討て大に之を破る

曹操が南陽の城を圍むや城將張繡堅く守て鐵砲、火箭を打出し鐵を沸して灑ぎ懸けさせ壕にて大河を塞入れたれば氷の勢ひ急にして寄付くべき便ありし曹操命を傳へて土を

運せせ柴薪を稠み舉げ沙囊を重ねて其上に雲の梯を構へ城を目の下に見下して入替々々攻戦ふ曹操自ら城の四方を能々窺ひ毎日西の門より大勢を指向け柴を稠み土を築せ梯を運ねて偏に此門より攻入んとす張繡四方より攻められて安き心なきも曹操自ら西の門を手痛く攻めて三日が間急をも繼せざりければ如何せんと議するも賈詡申しけるも某能く曹操が計を推したり敵の計に就て却て計ることを用ひむ曹操が不意に出で忽ちに擒にせん張繡が曰く願くは聞ん賈詡が曰く某矢倉の上より見るも此三日の間は曹操自ら馬に乗て城を巡る彼れが意は此城の東南の角も鹿垣逆茂木を舊くして半過ぎ朽ちたるを見て此が破り易からんと思ひ急に打ち破りて攻入らんと計り態と西

の方を急に攻る體をなむ城中の者共之を防んとて盡く一處に集る時を窺ひ却て不意に東南の角より入ん爲めなり張繡が曰く然らば如何して防ぐべき乎賈詡が曰く是れ何の難き事か候はん此のあたりの百姓を集めて西の門を守らせ時々鼓を打ち喊を作て大勢防ぐ體をなさしめ屈強の勢を盡く東南の方より鳴を諍めて伏置鐵砲を響すを合圍し盡く打て出る者あらば曹操を擒よせんこと亦疑ひなし張繡限りなく喜び百姓を西の門に集めて喊を作り鼓を打せれば案の如く曹操自ら兵を率て城を破ること今夜より崩るゝが如く小見せければ城中にも喚き叫んで防ぐ體をなま夜も既に二更の比に至りければすのや時分ころ善死

ぞとて曹操精りたる兵を驅て直ちに東南の角に廻り鹿垣逆茂木を打破る小防んとする者もなし偕て西の門ばかり小集り居て此を知らざるものと見へたり速に進免とて木戸を打破りて込入るよ出でぬ者一人もなく只西の門に鼓の聲の聞へけるが忽然として一聲の鐵砲耳根に響く程みそあれ此の如何にと驚く間も荒々の敵軍喊の聲天地を震えて十方より火をかけ伏勢雲霞の如くに起りければ曹操膽魂も身に沿走馬に鞭打て出んとする小張繡後ろより掩殺し東南の門を排て城中の勢悉く出でければ曹操が軍勢あらげ亂れて討るゝ者數を知らず壕に死人ふてぞ眞めたりける張繡追討に攻えて殺して五更の比に及び曹操十里あまり退きければ城中の勢是れまでと引回へし

敵の棄てたる馬物の具兵糧を取たることを限りなかりしこ
ろ深き計なれ

奇正子曰く孫武の言も守て必ず固き者ハ其攻めざる所
を守るありと云ふもの即ち南陽龍城の故か淮南子曰く
將ふ西せんと欲して之れ小示そ小京を以てそと今夫れ
本合戦は敵御方共に之を討りしものなりと云さも買討
ハ曹操の反を討りし丈けに遂に勝利を得たるなれ

○買討初度の追討を止たて再度の追討を勸む
曹操が南陽の城に張繡を圍むや荊州の劉表安衆と云ふ所
まで出張し路を截塞で曹操が上を支んとそ此時又都よ
り早馬來り河北の袁紹此の比都の内空虚なりと聞て大軍
を起して急ふ攻上んとそる由荀彧が書簡を以て告げ來り

ければ曹操以ての外に驚れ今都の内空虚なるに袁紹若し
攻上らと忽ち瓦の如くに解んとて取る物をも取り敢へず
兵を引て馳上る張繡之を開付け急に追蒐けて討んそとひ
しめけけるを買討練えて申しけるハ必ず追ふ可らそ若し
追ふ時ハ敗れん劉表申しけるハ曹操都に事ありて敗軍を
引て憐憫歸る我れ之を追はずんを何をか期んとて張繡と
一手ふなり一萬餘騎ふて追蒐くるに曹操ハ自ら後陣に居
けるが追手の蒐るを見て兼て期したる事なれば一軍を引
て取て回し散々に打破る劉表張繡したハか討れて引退き
買討に達て御邊の練を用ひず今大に敗れたりと云ふ買
討申しなるハ兵を調て今一度追給へ張繡が曰く既に一戰
に負けて敵ハ勇も御方ハ弱る争をか又追ふを得ん買

謂申しけるも兵勢は變り急に又追蒐ひ給はゞ必ず打勝
 給はん萬一勝さずまて回り給はん某が首を獻ん張繡然
 ば今一追ひ追て見んとて打立ちけれども劉表は疑て徒は
 ず張繡兵を驅て飛ぶが如くに喚以て曹操が勢に討て入り
 けれを戦のんととるもの獨りもあく馬物の具を打ち棄
 て亂れ騒ぎて逃走る張繡氣に乗て繼で追んととるふ折節
 季通と云へる者汝南にありて合戦のやうを承り馳來て曹
 操ふ力を副んとまて來る者ふ會して防ぎ支られしかば是
 れまでぞとて安樂へ引回を劉表之を見て大に驚だ買羽に
 向て申しけるの向に我が精兵を引て追蒐る時御邊之を止
 めて追はん必ず破れんと云ふ今又敗軍を引て再び追む
 必ず勝んを云ふ而して御邊の言に逃れざるの如何なる故

を何とて此の如く先見の明あるぞ買羽申しけるは是れ
 知と安き事なり將軍善く兵を用ひ給へども曹操に及ば
 ず曹操が勢誠ふ敗軍の後なれども追手蒐ふんことを知て
 自ら後陣に備て精兵を殿とす是の故に追手の勢壯なりと
 云へども打負くべきを知る曹操既に打勝て後ハ再び敵の
 追んとの思ひ寄らず都に事ありて心急ぐ故に屈強なる騎
 馬の勢ハ皆先に進み其身も路を急で一手の勢を後陣と
 一夫將に命じて守らしむ是に由て重ねて追ふ時ハ敵の不
 意ふ出るなり曹操が大將能く戦ふもの亦將軍ふハ及ぶま
 じ是れ必ず勝つべきの理ありと云けれハ劉表も張繡も其
 高論ふを服しなり
 奇正子曰く世ハ所謂機ふ臨んで變に應ずと云ふもの即

ち本計の聞ひか買調の計と凡將の窺ひ知るべからざる所あり曹操の又勝て兗の纒を堅結るを忘れたるが如し曹操能く兵法に通ず故に常なれを或の之を注意するこ
とあるべしと雖も此時に當てや其心専ら都にありて
他を思ふに違あらず是れ勝て兗の纒を堅結るを忘れた
る所以なり我朝の真田昌幸又此計を用ひて大に直江山
城守を敗りしことあり共妙計にして買調之を始めて
昌幸之れに倣ふ

◎第八章 玄德

○玄德、耕畑、豫言の詭計を以て曹操を欺く
玄德の都にあるや董承を勸めりて密に曹操を討むの計
を運ぶされけるが其疑ひを避ん爲めに常に自ら後園にて

野菜を作し水を灌ぎ、糞土を撒んで日を過しけり、關羽之を
怪んで兄今は弓馬の道ふ心を懸けず、小人の事を學んで野
菜を作て日を送り給ふの之れ如何なる故乎と問ふ、小玄德
笑て我れ深き心あり汝等が知る所にあらずと答ふ、其後曹
操の命なりとて召されければ何事やらんと相府に参りけ
るに曹操申しけるに我れ去年張繡を征伐せし時途中に水
あふしとて兵皆渴を苦みければ我れ心に一計を案して向
ふ小梅の林あり早し行て之を取れと云ひしに兵本等之を
實なりと思ふて急に進む程小口中に津を生じて遂に渴せ
ざりし事を思出し今小梅を探て賞斷せんとせ且つ美酒あ
り御邊と共小亭に會して樂むべしと云ければ玄德然る
べしとて相從て亭中に到り青梅を山の如く盤に貯へ二人

相坐して酒宴をまじ半酣に到て俄ふ雲興て急雨を催ふす
 時に曹操、玄德に向て曰く御邊の四方を經歷したれば必ず
 當世の英雄を知り給はん何人とか思給へる試に謂ひ給へ
 玄德の曰く我れ凡夫の眼を以て焉んを英雄を知らん曹操
 が曰く辭退る仕給ひを胸中より定めて思ひ寄りあらん玄
 徳の曰く我れ丞相の恩顧を受て朝廷に事ふると申せど
 も未だ英雄を知らぬ曹操申しけるは自ら知り給はずんば
 定めて名を聞き及びつらん願くは世俗を以て論じ給へ玄
 徳の曰く淮南の袁術は兵精く糧足り英雄と云ふべきか曹
 操笑て曰く袁術は枯骨なり我れ必ず日ならずして之を擒
 にせん玄德の曰く河北の袁紹は四代三公に上りて門下
 故吏衆く今冀州に虎踞して手下の大將計を爲さるもの數を

知らず英雄と云ふべきか曹操笑て曰く袁紹は色厲ふして
 膽薄し奸謀決することあふして大事に逢ふて身を惜み小
 利を見て命を輕んず是れ即ち癡疥の輩なり争が英雄と云
 ふふとを得ん玄德の曰く荆州の劉表は威九州を鎮めて八
 俊と呼ぶ英雄と云ふべきか曹操あざ笑て申しけるは劉表
 は酒色に溺る何んぞ英雄と云ふを得ん玄德の曰く呉の孫
 策は江東の領袖血氣方に剛し英雄と云ふべきか曹操笑て
 曰く孫策の父の名を藉る黃口の小兒なり焉んぞ云ふに足
 らんや玄德の曰く益州の劉璋は英雄と云ふべきか曹操が
 曰く劉璋の門を守る犬なり安んず英雄たらん玄德の曰く
 張繡、張魯、韓遂が輩は如何ん曹操手を打つて笑て申しける
 は此等の皆碌々たる小人なんぞ云ぬに足らん玄德の曰く

是れより外小某が知るところ人候はず曹操が曰く夫れ英雄
 の胸に大なる志を懷き腹小良計を隠して宇宙を包蔵する
 の機天地を併呑せんとをるの志あり玄德の曰く今誰の能
 く此の如くならん曹操手を以て玄德を指し又自ら已れを
 指して申しけるの今天下の英雄を唯御邊と我れと二人を
 と其言未だ了らざる小大雨さつと降り來て雷の鳴るこ
 と天地を崩すが如くなりしかば玄德震ひ戦き手に持たる
 箆を口りと取落さる曹操何をさそ畏れ給ふかと問ふに
 玄德答て曰く聖人も迅雷風烈則必變と云へど一震の威此
 の如ま曹操申まけるの雷の即ち天地の聲何んぞ驚き怖る
 ことあらん玄德の曰く我れ幼きより雷を怕れて身を藏す
 に所なきを怨む曹操之を聞て詐りとて夢にも知らずして

玄德を無用の人なりと思ひ冷笑ひて居たりけるころ淺暮
 なれ關羽張飛の城外小出で弓を射て遊び居たりしが聽て
 家に回りにて玄德を尋れば張遼許褚相府に伴ひ去れりと聞
 て大急ぎ馳せ行て後園小突て入れば番の者共群集
 て押しめんと闘死けるを悉く踏倒し直ちに小亭の前まで
 入りけるが玄德と曹操と相對して酒を飲むを見て外に立
 て入らざりければ曹操之を見て問ふて申しけるの二人何
 とて此に來れる予關羽答て曰く某二人丞相の兄を招ひて
 酒宴し給ふ由を承り劍を舞して一笑を助ん爲めに來り
 侯曹操其心を推して限りなく笑ひ是れは古の鴻門の會に
 あらず安んぞ項莊項伯を用んと云ければ玄德も亦大に笑
 ふ曹操左右の人に命じて二樊噲酒を給へと云れば關

羽張飛拜謝して酒を飲み酒宴休り別れて家に回る關羽申しけるは某二人兄の獨り出で給ふと聞て直事なすと存じ以ての外小驚きたり玄德密に箸を落しとる事を語り給ふに是れ關羽張飛其意を曉す玄德の曰く野菜を作り雷を畏る、是れ皆曹操を欺ん爲先の質成曹操の心根の畏ろしき者なれと日夜密に我れを窺ん我が野菜を作て自ら糞土を撒び氷を灌ぐとを爲て武藝の志無を知必我を無用の人と思ふべし又箸を落しとるは我を指て天下の英雄と云れ未だ答へざる所小幸ふして俄に雷鳴りはためきしがを大に恐る、體を爲して手に持とる箸を落し曹操に我れを輕んせしえて小兒の如く思ひしめんが爲めなり去れば我れを害さるの心なかるべしと語り給へば關羽張飛其高論

なるに腹しけり次の日曹操又玄德を招て酒宴する折かゝ河北より滿寵回り來りて北平の公孫瓚既に袁紹に滅さぬと告げよれば玄德大に驚き公孫瓚は我が親しき友なり且つ袁紹袁術一處にならんとするの勢ひあり若し二人力を拜せば由々しき大事あり願くは某行て之を討止んと云ふを曹操の忽ち許し奏問を経て打立つべき旨を命ずれと玄德を籠の鳥網の魚の外に出でたる心地して慌てて都を出でけるる處を放て山に歸らむが如く危りけることにもなり此時郭嘉の諸軍の巡檢小出で回りなるが玄德兵を引て徐州へ赴きとりと云ふを聞て以ての外に駭き急に曹操に見へ申しけるを丞相何とて玄德小大軍を授給ひしを曹操が曰く袁術が河北へ行くを半途にて討とめめん爲

めあり程翌進み出で、申しけるを往日玄德を豫州の牧に封じ給ふ時某等頻に諫しかども丞相遂に聽給えず今日又兵を授け給ふ是れ龍を大海に放ち虎を山に歸しむるあり後に如何んとも仕り難らん郭嘉が曰く我が心も此の如し玄德元より雄才あり民の意能く歸順す且つ關羽張飛萬人の敵なり久く人の下にあるものにあらず其計の深きこと及び難し古人も一日敵を縦す萬世の患と云へり今兵を與給ふハ虎に翼を添ふるあり曹操が曰く我れ能く玄德を窺ひ見るハ閑冷と死に野菜を作り酔中雷を畏れて箸を落さ物の用に立つ入にばらず何んぞ憂ふるに足らん程翌が曰く閑冷ときに野菜を作り雷を畏れて箸を落すハ是皆彼れが計なり豈に本心の事ならんや丞相の明能く天下を

照を何とて玄德一人に迷はされ給ふを曹操之を聞て足らずりして申しけるハ我れ誤て此人に出抜れたりとて長嘆して後悔し誰か追蒐て擒にして来らんと問ふハ一人進み出で、申しけるハ某願くは五百餘騎を率ひて玄德を撃と歸らんと云ふ諸人之を見れば虎賁校尉許褚なり曹操いしくも申したりとて喜びけれを許褚五百餘騎を引て飛ぶが如くハ打向ふ關羽張飛ハ後陣ハ備へけるが後に馬煙を擧げて大勢の來るハ必ず追手あらんとて玄德に告げ知せ陣を取て來るを待つ間も荒々の許褚勢ひに乗て馳來り玄德の左右に關羽張飛が馬を雙べて立るを見て噫したるにやありけん響を扣て進まざりしかハ玄德問ふて曰く校尉何とて此に來れる許褚が曰く丞相の命あり將軍早く兵を某

に渡して都へ回り給ふべし玄徳の曰く古より大將外にあ
 るときは君の命も受ざる所ありと稱す我れ天子に見へて
 詔を受け又丞相の命を蒙りて既に是れまで打出でとり御
 邊如何なれを輕々しく來て我れも代らんとする予程翌郭
 嘉が徒頻に賂を求めかども我れ更に與へざり故妄に
 丞相に讒言して今御邊をして追へまむるならん汝等が如
 き不義の徒は今寸々斬て棄んずるなれども我れ深く丞
 相の恩を受けたれば忍びざる所あり御邊早々に回て此事
 を宜しく言給へとて馬を早めよと云へを流石の許楮もす
 べきやうなく空しく回りにて曹操に右の趣きを語る曹操之
 を聞て程翌郭嘉を賣めて申しけるは汝等密に玄徳に賂を
 求め彼れが與へざるを怨て惡きまふ讒を搦ふに何事予

玄徳の元より我れに背く心あり程翌郭嘉頓首して申一
 るは丞相是れも亦玄徳が詐りて云ふを信じて却て某等を
 疑ひ給ふか曹操笑て曰く彼れ既小遠く出でたり再び追ふ
 とも最早追付くまじ我れ又汝等を疑はず汝等心を安んせ
 よとて坐を起ちけるが心の内尙半信半疑にして決せざ
 りとぞ嗚呼曹操が後悔先き小立たずして今思ひ知りた
 るもと後に三國鼎足の勢を爲すの基とぞなりぬる
 奇正子曰く徳川氏の豊臣氏に代て政權を握るや心密に
 大諸侯の多くあるを憂ふ故小何んその事小寄せて之を
 滅さんと謀る此時前田氏に常に鼻穴を刺すまて内よ
 り長毛を外に出し恰も外道の如く殆んど痴呆小似たり
 諸臣之を諫むれば否や此の鼻毛刺るまへ此は

是れ加賀能登越中三ヶ國百二十萬石安全の寶なりと云
ひしが果して他の小智慧のあまざる者へ或へ全く
滅され或へ祿を削られけるに前田の鼻毛彼れが痴呆は
其儘棄て置くも何事をか仕出のさんどて遂に百二十萬
石を全く保つことを得たり是れ徳川氏以來前田氏の
祿を有する所以あり玄徳の閑冷と記に野菜を作り雷を
畏れて箸を落すは正に此れに類す何國にても智者の爲
せる事は一なるものと見へたり

◎第九章 周瑜

○周瑜反問の謀計を以て蔡瑁、張允を除く
吳魏江中に兵を交へるや魏の兵は皆北國育ちにて水軍に
習はず然るに荆州より降參の大將蔡瑁、張允の二人深く水

軍の妙を得たり周瑜思ふやう我れ先づ此の二人を殺さず
んを曹操を敗ること叶ふまじやがて折もあつば反問の計
を用ひんとて工夫する折りあら江北より故人蔣幹來れと
報す周瑜は其説客に來りしものたることを知ると云ども
是れ反問の計を施すに屈究なりと思ひ禮を施して之を迎
ふ周瑜酒宴を設けて半酣に至りける時軍中得勝と云ふ樂
を奏して大將に申しけるは是れは我が同窓に書を學びた
る舊き朋友あり今江北より來ると云ども曹操が方の説客
にあらずと云ふ皆心を定めて疑ふこと勿れとて太史慈を
呼出し汝は暫く我が劍を帶せよ今日は偶舊友小出合たれ
ば昔の好に酒を飲んと思ふあり誰にても曹操と我國の合
戦の事を云ふ者あらば此劍を以て立ちどころ小斬て棄よ

と云ければ太史慈劍を取て席上に坐す蔣幹は之を聞て周
 瑜を説くところか針の席に坐するの心地して一言片句を
 も出さず周瑜が曰く我れ兵を起してより以來一滴も酒を
 飲ず然れども今親しき故人に逢ふて心少しも疑ふことな
 し願くは共に酔ふて此比の鬱氣を散さんとする周瑜又將幹
 が手を取り大丈夫の士既に知己の主に逢ふて外君臣の義
 を守て内骨肉の恩を結び諫をなせば必ず用ゐられ計を施
 せば必ず従はれ禍福共に受けて生死を同ふせんとを假令
 古の蘇秦、張儀、陸賈、酈生が如き者來て詞懸河の如く舌利刀
 の如くあるも安んぞ能く我が心を動すふとを得ん況んや
 今時章を尋ね句を摘む所の腐敗儒者あどが一面の詞を以
 て等閑ふ我を説くをや我が心の金鐵よりも堅しと云て大

に笑はれ蔣幹はものをも言はず其顔恰も土の色の如く
 心ハ刀や錐の如し滿座の人々は醉を盡くして樂免せも蔣
 幹一人其心碎くる様にぞ覺へける夜も早や深更ふ及びぬ
 れを蔣幹酒に勝すと辭するに予周瑜其臂を執て申しける
 と久しく御邊と同じ床に臥せ今夜ハ足を交へて眠るべま
 いざ此方へ來り給へとて共に帳中に入り本より工とたる
 ことなれば周瑜伴りて大に酔ふたる真似ををし衣帶をも
 解くみと能はず嘔吐狼籍床の上に平臥せり蔣幹は心悶て
 眠るまと能はず軍中に四更の鼓を撃つを聞て密ふ起て外
 を見れば殘燈尙は明かふ照して周瑜が射雷の如し密に起
 て其傍を窺見れを卓の上ふ多くの書簡あり開て之を見る
 に皆陣中往來の書よして内に蔡瑁、張允謹んで封すと書き

たる書簡あり怪み驚て開て見れば其書に曰く
 某等降採非圖仕録皆勢迫耳今已賺北軍因於寨中但得其
 便即將曹賊之首獻于麾下早晚人到便有回報謹此敬覆希
 冀照察
 と見了て大に愕き此の二人の舟手の總大將を承て御方八
 十三萬の兵を司る今若し浩る逆心あり大なる禍ひなり
 と思ひ其書簡を懐に入れて立ちける時周倫寢反しければ
 急小燈火を打滅去本の寢所へ行きなるに周倫口の内より
 を含み將子翼我れ近き内に曹操が首を見せ申さんと云け
 れば將幹勉めて答をなす稍ありて子翼公暫く此に留り
 給へ我れ必ず曹操を殺して其首を見せんと云げれば將幹
 其故を問んとするに周倫早や睡入ても首の首は將幹床の

上に伏して既に四更の終りに到りけると覺ひしき比忽ち
 一人外より來り周都督醉は醒ぬると呼びければ周倫夢打
 驚きたる體にて起き上り此に寢たる者何人かと問ふ
 其人答て昨日故人の將幹と同じ床に寢給へしが今何故に
 更免て問ひ給ふぞと云ければ周倫後悔して申しけるは我
 れ此大事を承りてより一滴の酒をも飲まざりしが昨日少
 し酔て前後を忘却れたり汝我れを呼ぶは何れ用子其人答
 て曰く江北より人來れり周倫急小叱叱り聲を低うせよと
 云て將幹の方へ向ひ將子翼々々と二三回呼びければ將
 幹と寢入りたる體にて物言えず周倫忍びやかに帳外に出
 ければ將幹密に耳をさるをぶて之を聞くは誰とは知らず
 江北より來る由にて蔡瑁張允も随分隙を窺ひ候へども

急ふの中々なり難しと云ふ聲低く聞へて其後の言葉甚だ低ふして詳かならず其ありて周倫又帳中に回し將幹を呼びけども寝入たる體して答ひざりしかば周倫又帯を解て臥したりけり將幹心の内に周倫の智深き者なれば夜明けて若し此の書を尋ねることのあらんと思ひ既に五更の比に到て周倫を呼べども能く寝入て鼻息頻りなりしかば潜に帳中へ出で岸を廻りて舟を尋ね飛ぶが如くに江北に回て曹操に見へければ曹操如何ふ事ハ成就えたるかと問ふに將幹答て某累に勧め申せども周倫が心鐵石の如くふして説き難しと云ければ曹操怒て申しなるハ事の成らぬは是非なけれども敵ふ笑れんこと口惜けれ將幹が曰く某周倫を説き得ずと云ども他ふ一大事を聞き來れと傍の

人を退て申すべし曹操近侍の人を退け何事ぞと問ふに將幹右の趣きを語て彼の書簡を出しければ曹操大に驚き聞き見て愈々怒り奴原海を企をまさば大なる禍をなさん早く斬て棄んとて即時ふ蔡瑁張允を呼び今兵を進めば何如何と問ふふ蔡瑁答て曰く舟手の勢調練未だ熟せず輕くしくは進み難し曹操ハト睨んで兵能く熟せそ我が首を周瑜に送らんかと云ければ蔡瑁張允其故を知らず驚き慌てて答ふること能はず曹操其れ討てと云ふ程こそあれ武士共引出して了に二人の首を斬る須臾ありて諸大將皆集り何故ふ斬給ふぞと問ひければ曹操心の内ふ初免て悟り是れハ敵の計あらんものぞと思ひなれども敢て色に出さず此者法を背て慢りしゆへ斬て棄てると云ければ諸將皆痛

と見て借とばと

奇正子曰く抑も假造の事實は凡百皮相の合宜一時に集
て来るを常とす故に活眼者より之を見れば忽ち其假造
の事實たることを發見する亦容易の業なるべし周瑜が
反間の計も亦凡百皮相の合宜を一夜に現し出したるも
のなれを活眼者は之れを欺かるることあるべしと云
ふも彼れが反間の計の巧みなる此の如くにして平凡儒
者も應ず如何んぞ之れが爲め欺かれざるを得んや噫

○第十章 孔明

奇正子曰く武將第一の計は軍師其人を得るにあり一た
び之を得るや其言ふ所を用ふるに有故に又謀士より之
を云へば其功を主將其人を得るにあり一たび之を

得るや能く我が言ふ所を用ゆるにあり而して武將
に於ては軍師其人を得るに敢て難きにあらねども其言
ふ所を用ふる頗ぶる難しとす又謀士に於ては主將其人
を得る敢て難きにあらねども我が言ふ所を用ゆるに
難しとす是れ古今の史上に徴して明かある所なり古
來伍子胥范增或は具田幸村等皆主將其人殺て王覇の才
能なきにあらねども常に其言ふ所を用ゆるにあらねども
ゆ終ふ敗績しよるもの善き殷鑒なれ玄德等兄弟三人に
て孔明を山間に訪ひしに遊し其實在者なるに不在を稱
して對面せず空しく歸つらむるもの二たび然るに三
たび足を費して之を顧みるに至りて初めて在在を稱す是
れ無難千萬の至りなり又孔明其人の性質彼れが如く當

此體験あるに何以て斯くも無禮を極たたるみ抑も故
 り何ぞや孔明事へて用ゐられざるを患ふ玄德等果して
 熱心我を慕ふて來りしものなるや將た僅かに他人の傳
 説を聞き輕々來りしものなるか一二顧にて未だ以て
 禮を判すべからざるものあり故に無禮を忍んで以て三
 顧の足を勞せしめ果して其熱心我れを慕ふにあるを察
 し斯ては之れに仕ふるも決して我が首ふ所の用ゐられ
 ざるの患なからふと確心し之に對面して主従の約を
 結びしを余孔明は就て之を聞じにあつたを果して然
 るや否や之を確知すべしにあらねども其前後の動を以
 て推察すれば必ず左あらんとおもふを覺へつれ左なくと何
 ぞ其れ故なく居がらにして三顧の足を費さしむるの理

あつらんや始め徐庶の玄德に別れて都に上つんとするや
 途次臥龍岡へ立寄りたるに孔明對面きて問ふて曰く御
 邊姓に來るの何の爲あるや徐庶が曰く某ハ新野の劉
 玄德小事へまに曹操に老母を捕へられ己むよとを得ず
 都へ上るものなり某別れ小臨んで先生を玄德又薦む若
 し召るゝことあつた願はくハ辭することあく平素の大
 才を展べ夙昔の所學を施し給へ孔明勃然として色を變
 じ申けるハ御邊ハ我れを以て祭の儀に爲さんとするか
 とて袖を拂て奥にぞ入りけるとかや是を以て見れば
 孔明と莊周と同じく世に望みあく仙瓊ふ遊ばんとする
 もの、如くなれば三顧の足を費さしたるこ之れが爲
 めありとも思惟るれぞ此言決して孔明の本心ふあらす

何ぞや孔明常に其身を管仲樂毅に比す管仲樂毅の世に
望みなき陰君子にはあらで世に望みを屬したる者なり
此人等に其身を比す必ず善き主君を得て功名をなせば
やと懸念せしは推して知るべしのみ一たび玄德等の來
るや心密のふ喜び二たび來るや大に喜ぶと雖も若し
二顧の勞を以て其志を放棄して復た來らざる者ならん
ふは我れ之れふ事ふるも能く用ゐられざるべし用ゐら
れざれを以て事をなを能はず荷くも君に仕へて事をな
すあらんと欲せし始めを重くするに若かず是れ傲慢ふ
あらず勢ひ然らざるべからず韓信の大功を成す能く始
めを重くしとるに因らずんばあらず是れ孔明の三顧の
請を受けて始めて謝面もなる所以なり未れば二顧の勞

後百本

を空しからしめたるハ實ハ玄德の心の試題として孔明
の深き謀計なれ我を以て祭の體に爲さんとをるかと云
ふの志を推せば莊周にさう身を比すべきに左ハあく却
て管仲樂毅に身を比したるは世に望みあること推して
知るべきのみ孔明の深謀遠慮祁山にあらずして赤壁ふ
たり赤壁にあらずして三顧に及び嗚呼此の深謀遠慮以
て世に出づ後の奇計の見るべき者ある亦知るべきのみ
聊か三顧の所以を論じて舒に孔明の奇計を記さんとす
○孔明一夜に十萬の矢を得
孔明ふ説かれて呉魏江中に兵を交へるや魏の兵ハ皆北國
育ちにて水軍ふ習はず然るも荆州より降参の大將蔡瑁張
允の二人深く水軍の妙を得たり其の周瑜思ふやう我れ先

智果奇計

後百本

づ此の二人を殺すんを曹操を破るふと叶ふまじと其後
 ち工夫を廻して蔡瑁張允二人を曹操に殺るさむ(周倫
 の計策蔡瑁張允二人を殺ろしたる事ハ周瑁が章に記した
 れバ茲ふ之を畧しぬ讀者宜く参観すべし)曹操既ふ蔡瑁張
 允を殺したる由呉の國に聞へけれと周倫大ふ喜び我れ曹
 操を破らんと思ふふ彼の二人が舟手の都督たることを患
 ふ今計を以て之を滅せり曹操を討つこと掌にありと云け
 れバ魯肅が曰く都督の計の如くなる上は曹操とても畏る
 小足らず周瑁が曰く我れ量るに諸大將の内に此の計を知
 る者あらじ只孔明の知ることあらん御邊行て其景色を探
 り給へ魯肅乃ち船中に到り孔明に逢ふて坐定て此間は軍
 務に暇なくして來り見す然るべし計あらば教へ給へと云

ければ孔明が曰く某を周都督ふ喜びを申さどと思へども
 未だ相逢ふことと得ず魯肅が曰く喜びと何ぞ孔明が曰
 く周倫今御邊を以て某が知る知らぬかを探給ふことを喜
 びと申すありと聞て魯肅色を失ひ先生何ぞ知り給ふぞ
 と問けれと孔明の曰く是れ程の計と蔣幹を欺き得るも曹
 操は後に悟らん我れ之を喜ぶなり曹操今毛玠于禁を以て
 船手の都督とを此二人は曾て船軍の法を知らず却て自ら
 害をなさん魯肅呆然て口を開くこと能はず暫く他事を語
 りて別れんとすれと孔明申けるハ願くと某此事を知りと
 りと周倫ふ告げ給ふな若し告げ給へ又我れを害せんと
 するの心起らん魯肅諾して本陣ふ回り周倫に逢ふて明か
 に語りければ周倫ハ毎度孔明の深智に驚き若ま之を生け

て置かば後日呉の國の禍をなさん如かず今の中に孔明を
 殺らして後日の患を除かんと思ぬこと屢々なり今魯肅が
 語るところを聞て大ふ怒り若し孔明を生れて置かば必ず
 き我が計を漏さん且つ後日呉國の患を除らんこと彼れを
 殺すにあり我れ早く心を決して之を殺さべし魯肅が曰く
 今孔明を殺さば必ず曹操に笑さるべし周瑜が曰く我れ私
 に殺さず公道を以て彼れが心を怨なかつし魯肅が曰く我れ私
 べし魯肅が曰く願くは之を聞かん周瑜が曰く今聞給ふと
 と勿れ明日之を見給へとて次ぎの日諸大將を悉く集め孔
 明をも招かば孔明は欣然として出来る周瑜孔明に向て曰
 く我れ一日も早く敵を破らんと欲す大江の上の戦争何を
 以てか曹操に勝たん先生願くは計を教へ給へ孔明が曰く

船戰の警を放つに如くべからず周瑜喜んで申しけるハ
 先生の詞善くも我が心に合へり昔し周の太公望は自ら許
 多の武具を造ると聞き及ぶ今我が軍中に矢少しく不足な
 り先生願くは巧匠を命じて十萬の矢を造らせ給へ互ふ君
 の爲免なれば必ず辭退あるべからず孔明が曰く我れ殊に
 矢を造くるの方法を習へり十萬の矢を造くるはと何より
 以ていと易きことなり日限を定めて造り出さん周瑜が曰
 く十日の内に造るふとを得べしか孔明が曰く今敵境に臨
 んで何時戦はんも知り難し十日と定め給はば事延引して
 大事を誤るふともあらん周瑜が曰く然らば先生何時か造
 り出さん孔明が曰く我れ必ず三日の内に十萬の矢を造る
 べし周瑜が曰く軍中より敵言なし孔明が曰く我れ何んぞ

戲言を云はん願くは軍令状を書て三日の約を背かば必ず
 罪を被らん周倫大に喜び軍政司を呼んで諸人の前にて軍
 令状を書せ酒宴を設けて饗應せければ孔明申しけるは今
 日の最早暮に及べし明日より第三の日ふ至らむ五百人の
 士卒を我が船の邊に遣ひして十萬の矢を運しめ給へとて
 數盃を傾けて予別れければ諸將も亦悉く出て去りにける
 魯肅密かに周倫に問ふて曰く孔明が云しこと詐りふてハ
 候ふぬか周倫が曰く彼れ自ら命を送れり我れ私に云しに
 もあらず諸人の前にて自ら三日と約を成せり彼れ兩の脇
 ふ翅を生せんいざ知らむ身體を粉にし精神を凝すとも
 よも三日の間には十萬の矢を造ることを得じ我れ又巧匠
 に内命を下して矢を造るに用ゆる物を皆な滞らせて日限

を相違せしむべし第三の日ふ至らば彼れ如何にして身を
 通るべき只不審まきハ我が十日と云しを彼れ三日と約し
 て其顔色變るふとなし御邊船中に行て彼れが氣色を窺へ
 給へ魯肅乃ち孔明が船に行き内ふ入て坐定りければ孔明
 申しけるやう我れ再三御邊を顧んで必ず周倫に告げ給ふ
 なと云しを語り給ひて今果して浩る事を引出し給へり三
 日の内に十萬の矢を造らねば必き軍法に行ハれん願くは
 之を救給へ魯肅が曰く先生何故に我れを恨給ふ予や初先
 周倫が十日と云しを先生自ら三日と定給へり是れ好んで
 得たる禍あり我れ何んう救ふことを得ん孔明申しけるハ
 御邊願くは暫く二十艘の小舟を借給へ船毎に士卒三十人
 を載せ皆青き布の幕を張り藁を束ねて四方ふ積む此岸の

邊に浮給へ我れ別に計あり第三の日ふ至らば必ず十萬の
 矢を造り出さん此事決して周倫に知らせ給ふな若し知ら
 せ給ふときは我が計を妨げん魯肅其意の那邊ふあるを知
 す本陣に回て周倫に見へ孔明竹羽膠漆の類を用ゐず三日
 の内に必ず十萬の矢を造らんと云ふ如何なることぞと
 云ければ周倫も大に疑ひ我れも亦其故を知らずとぞ申し
 ける魯肅の約に違はず早船二十艘を調へて三十人宛士卒
 を載せ青き布の幕を張り上に旌旗を挿んで束ねたる藁を
 四方に積みて孔明が舟の邊に浮べけるが次ぎの日ハ空し
 く暮て第二の日も亦過ぎぬ第三の日ふ至て其夜の四更に
 孔明魯肅を召して船に乗給へと云ければ魯肅が曰く是れ
 は如何なる故ぞ孔明が曰く我れ江花ふ行て矢を取らんと

欲す御邊も共に來り給へ魯肅が曰く其矢何處ふ之れあり
 候予孔明が曰くぞのみ此處にて問給ふも早く船を出せと
 云ふ程ころあれ二十艘の船を長繩にて相連ね北を指し
 て推出せば今宵の霧深く起捲て面を對をも見へ分たず
 前後深々として暗かりけるに孔明ハ魯肅と酒を飲み五更
 の比ふ至て既に曹操が水寨ふ近付二十艘の船を西より東
 に引連ね俄かに鼓を拍て喊の聲を揚げたりければ魯肅色
 を失ひ手足を張て畏れ戦きふは物も狂ひ給ふか曹操が大
 軍討て出でば如何せんと思給ぬと云ければ孔明笑て曰
 く我れ量るふ曹操ハ奸雄なりと申せども亦能く兵法に通
 じ此の霧深きを見れば必ず輕々まくハ出來らじ我等は心
 静に酒を飲み霧晴て後ち回るべし我れ自ら此より御邊

孔明が
智一時に
十万の夫
と得る

